

グラフで見る **令和7年**

東京の労働安全衛生



トップが発信！ みんなで宣言 一人一人が「安全・安心」

東京労働局 労働基準部

はじめに

令和7年度は第14次東京労働局労働災害防止計画（2023年度～2027年度）の3年度目に当たります。

東京労働局では、「Safe Work TOKYO」の下、“トップが発信！ みんなで宣言 一人一人が「安全・安心」”をキャッチフレーズとして、すべての関係者が認識を共有して安全・安心な首都東京の実現に向け、官民一体となった取組を推進しています。

なお、労働災害による死亡者数及び死傷者数は、いずれも新型コロナウイルス感染症のり患による労働災害を除いた労働災害発生状況としています。

目次 CONTENTS

	はじめに	1
1	労働災害による死傷者数の推移（休業4日以上）	3
2	業種別死亡災害発生状況の推移	4
3	事故の型別死亡災害発生状況の推移	5
4	業種別死傷災害発生状況の推移	6
5	事故の型別死傷災害発生状況の推移	7
6	業種別・事故の型別・起因物別死傷災害発生状況	8～9
7	建設業における過去5年間の死亡災害発生状況（令和2年～令和6年）	10～11
8	第三次産業における死傷災害発生状況	12
9	第三次産業における業種別・事故の型別死傷災害発生状況	13
10	事業場規模別死傷者数と度数率の比較	14
11	令和6年死亡災害事例（抜粋）	15～16
12	過去5年間の項目別有所見率等の推移	17
13	業務上疾病発生状況の推移	18～21
14	東京の労働衛生関係災害発生事例（令和6年）	22

凡 例

全国の統計

死傷者数は、平成23年までは労災給付データ、平成24年以降は労働者死傷病報告による。

死亡者数は、死亡災害報告による。

※ 平成23年は、東日本大震災を直接の原因とするものを除いた数である。

東京の統計

1. 死傷者数は、平成14年までは労災保険給付データ、平成15年以降は労働者死傷病報告による。

死亡者数は、死亡災害報告による。

※ 平成23年は、東日本大震災を直接の原因とするもの（死亡者5人、死傷者55人）を含んだ数である。

2. 製造業は、電気・ガス・水道・熱供給業を含む。

3. 運輸業は、運輸交通業及び貨物取扱業の計である。

4. 第三次産業は、

① 電気・ガス・水道業、運輸交通業及び貨物取扱業を含まない。

② 労災非適業種を含む。

5. 業種の「その他」は、鉱業、農林業及び畜産・水産業の計である。

6. 比率の合計は、小数点第二位を四捨五入しているため、100%とならないことがある。

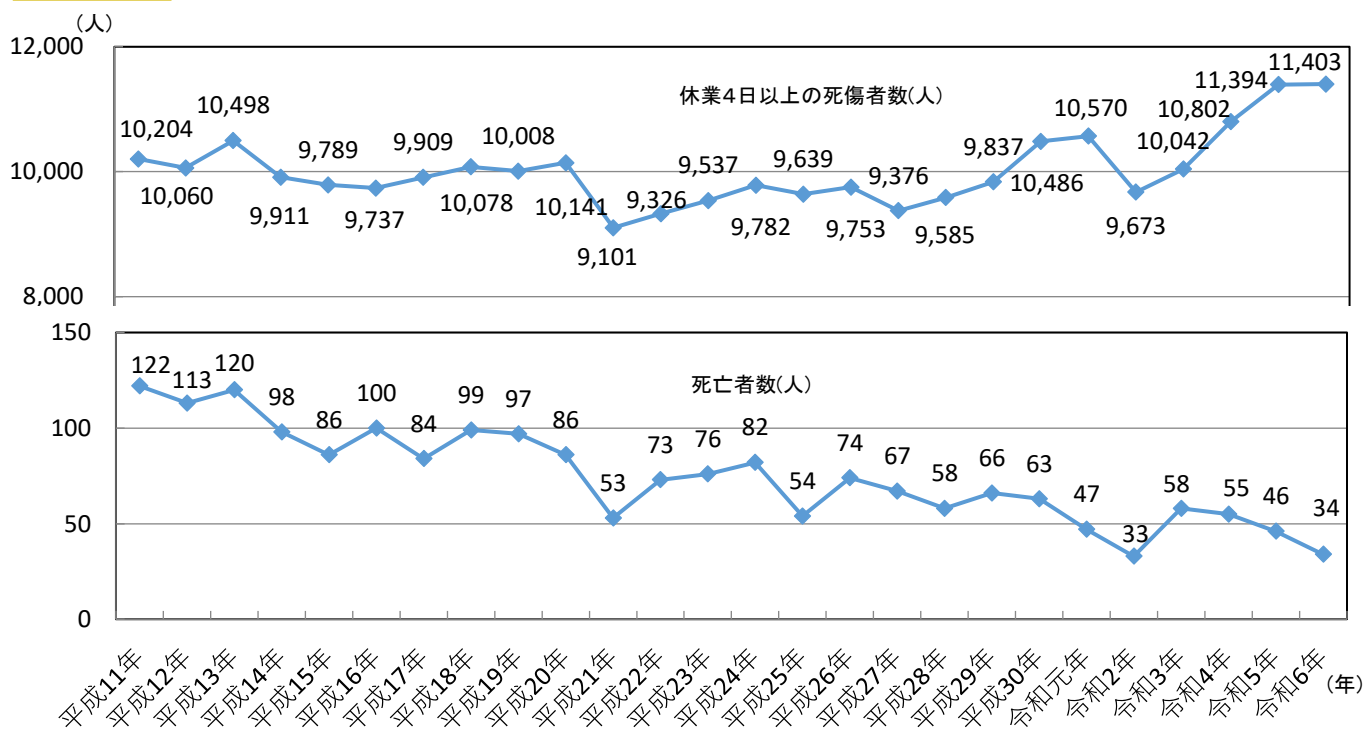
労働災害による死傷者数の推移（休業4日以上）

東京の労働災害の死傷者数は、リーマンショックの翌年の平成21年は9,101人と最少を記録しましたが、その後は増加傾向にあり、令和6年には、新型コロナウイルス感染症へのり患によるものを除いた死傷者数が11,403人となり、近年で最も多い発生状況となりました。

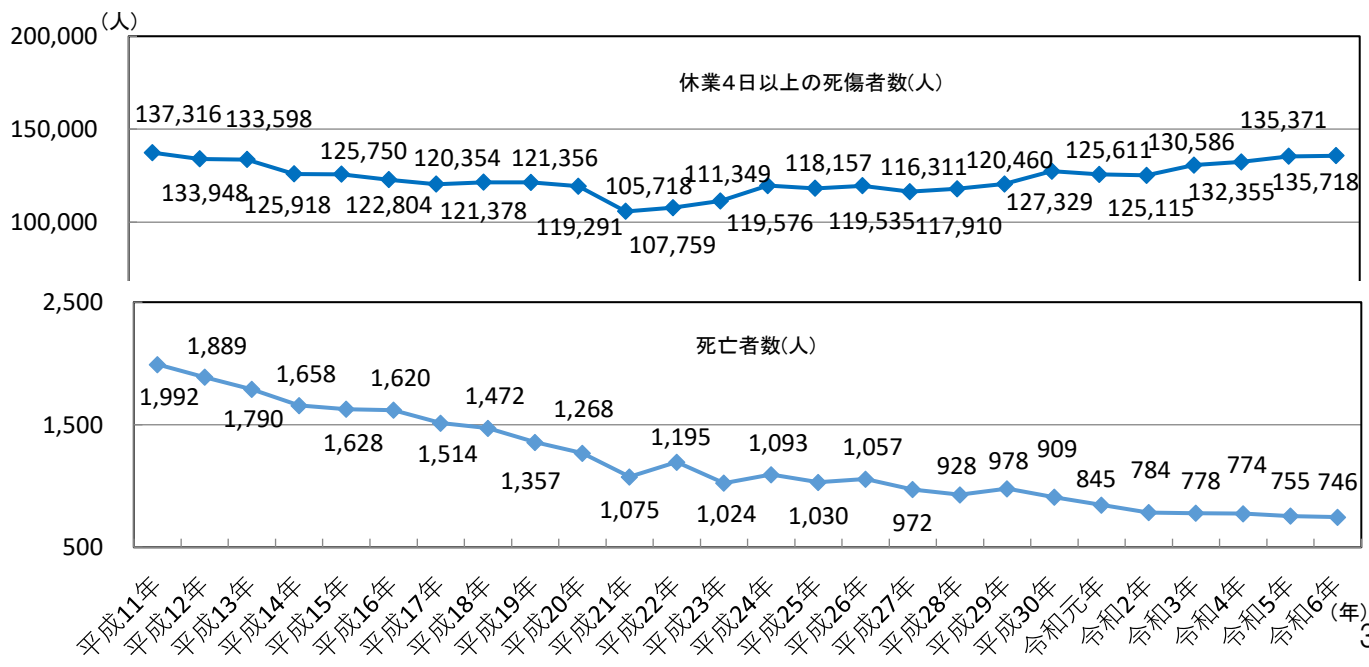
また、東京の労働災害による死亡者数は、新型コロナウイルス感染症へのり患によるものを除いて令和6年は34人で、令和5年と比べて12人（26.1%）減少となりました。

労働災害による死傷者数の推移 （新型コロナウイルス感染症へのり患によるものを除く）

東京



全国



業種別死亡災害発生状況の推移

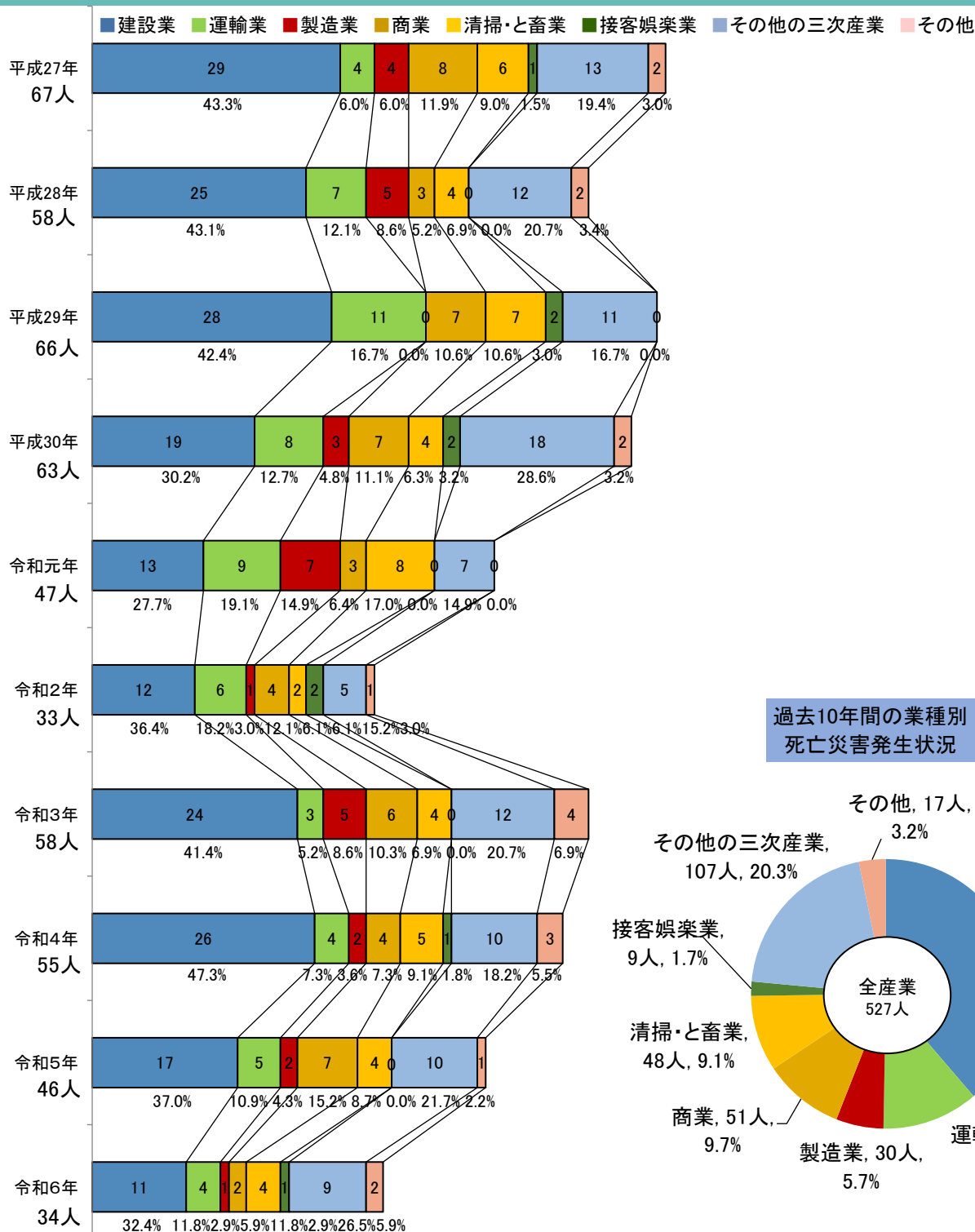
－ 死亡災害の9割以上が建設業、運輸業及び第三次産業で発生 －

令和6年の死亡者数34人を業種別にみると、建設業は前年と比較して6人減少の11人、商業等の第三次産業(※)は前年より5人減少の16人となりました。

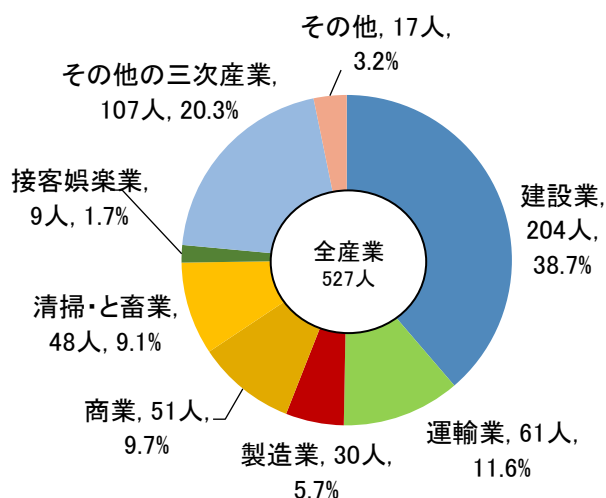
全業種に占める死亡災害の割合は、建設業32.4%、運輸業11.8%、第三次産業47.1%であり、この3大業種で全体の9割を超えています。

※ 第三次産業は下図において、商業、清掃と畜業、接客娯楽業、その他の第三次産業の合計を指します。

業種別死亡災害発生状況の推移 (新型コロナウイルス感染症へのり患によるものを除く)



過去10年間の業種別死亡災害発生状況



事故の型別死亡災害発生状況の推移

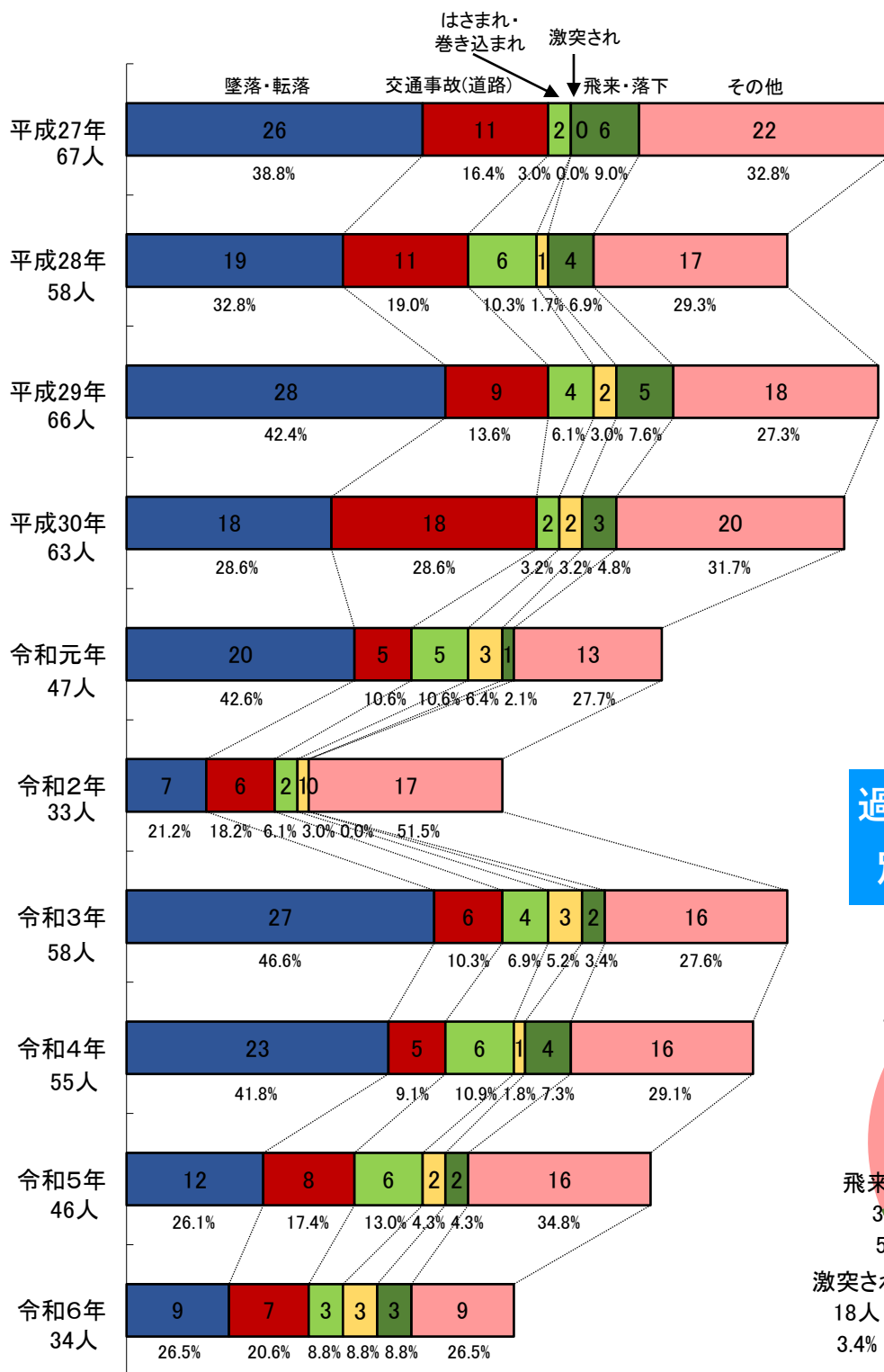
－「墜落・転落」がトップ－

令和6年の死亡災害34人を事故の型別にみると、「墜落・転落」が9人と前年より3人減少しているものの依然最も多く、全体の4分の1を占めています。

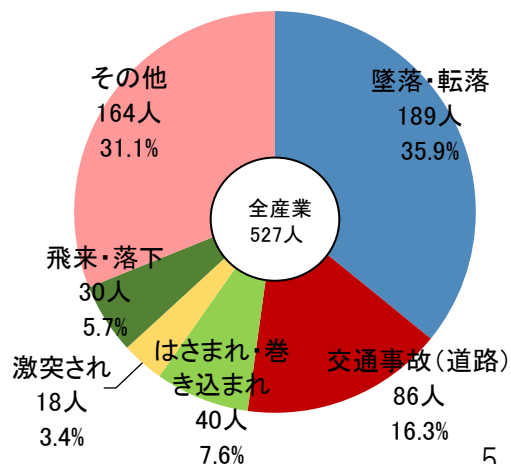
続いて、「交通事故（道路）」が7人の順で多く発生しました。

事故の型別死亡災害発生状況の推移

（新型コロナウイルス感染症へのり患によるものを除く）



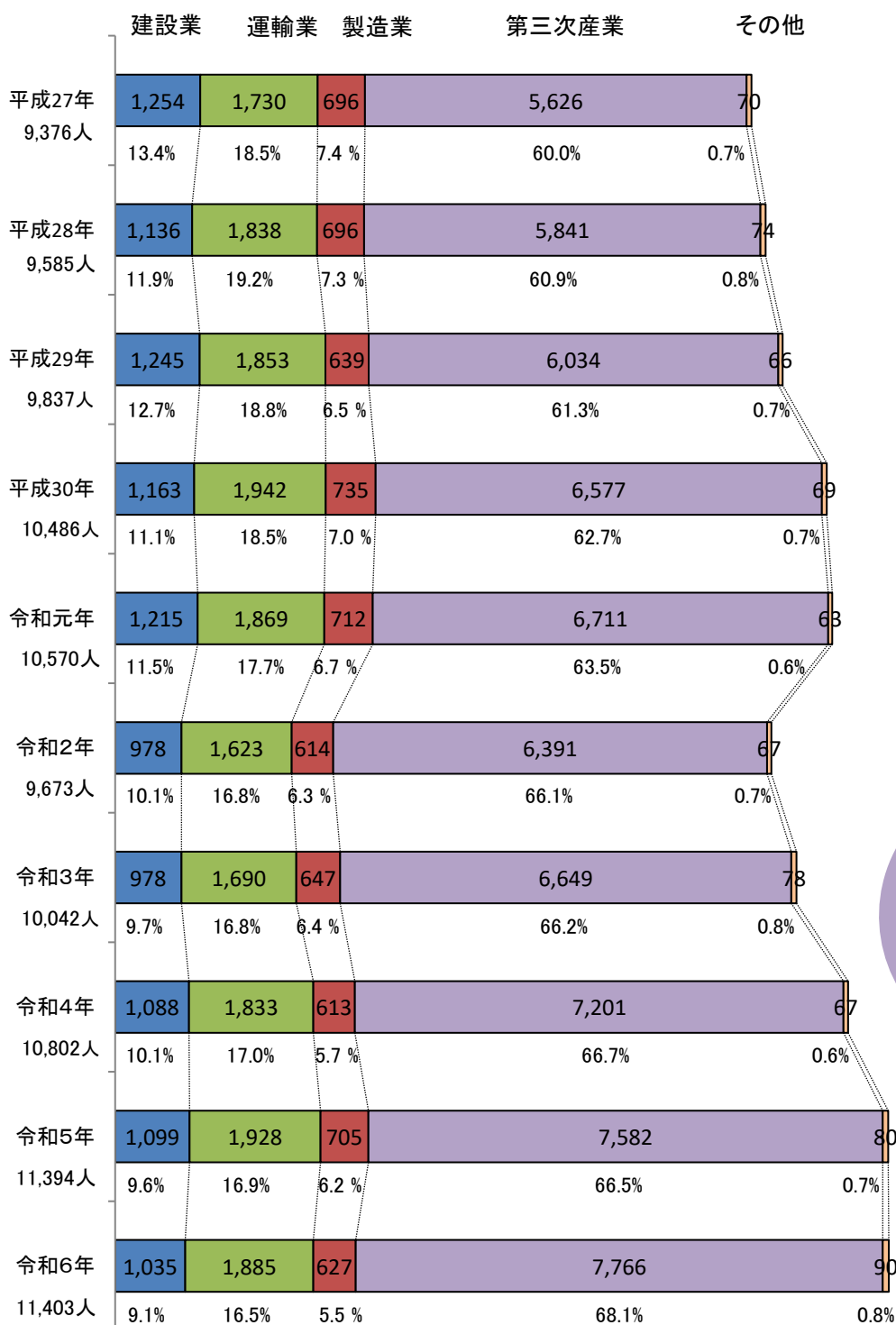
過去10年間の事故の型別死亡災害発生状況



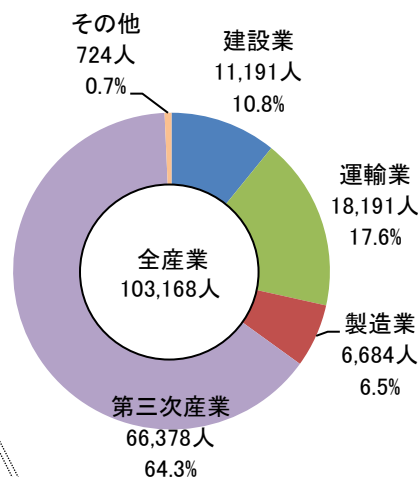
令和6年の休業4日以上産業別の死傷者数は、第三次産業が68.1%を占め最も多く、次いで運輸業が16.5%となっています。

平成27年以降、第三次産業が全体に占めている割合が60%以上となっています。

業種別死傷災害発生状況の推移 (新型コロナウイルス感染症へのり患によるものを除く)



過去10年間の業種別労働災害発生状況



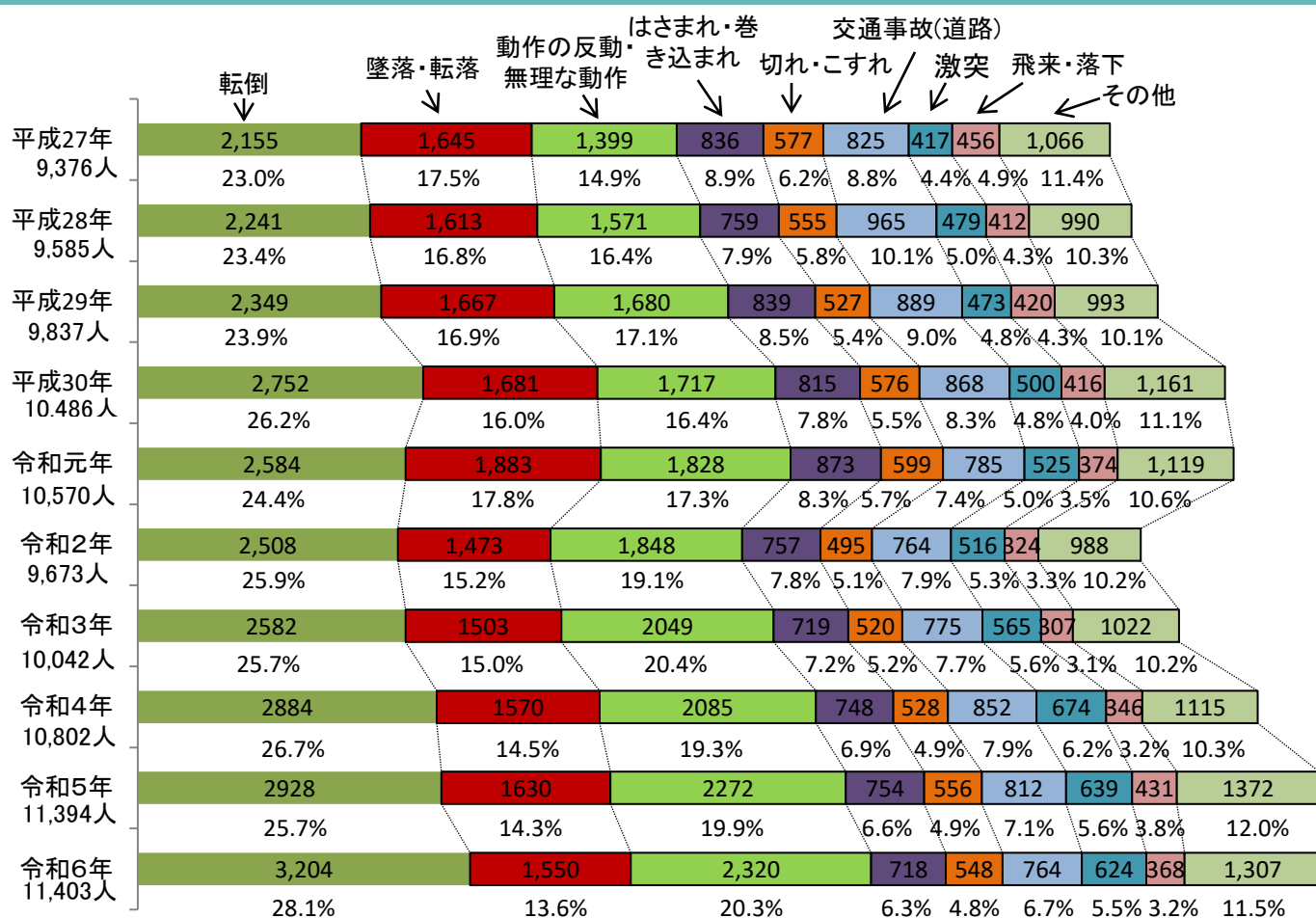
事故の型別死傷災害発生状況の推移

－ 「転倒」の発生割合が全体の約3割 －

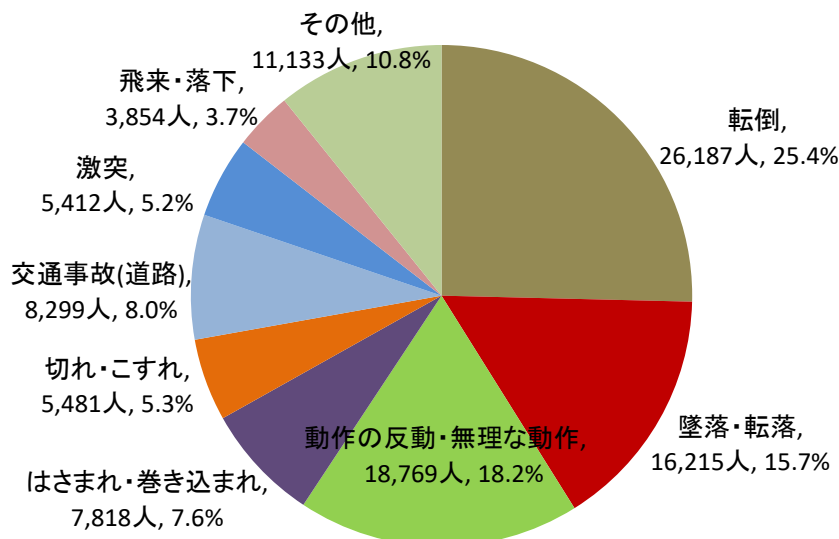
令和6年の死傷災害を事故の型別にみると、「転倒」が28.1%と最大の発生割合であり、「墜落・転落」、「動作の反動・無理な動作」を合わせた災害で、全体の6割を超える状況となっています。

事故の型別死傷災害発生状況の推移

(新型コロナウイルス感染症へのり患によるものを除く)



過去10年間の事故の型別死傷災害発生状況



業種別・事故の型別・起因物別死傷災害発生状況

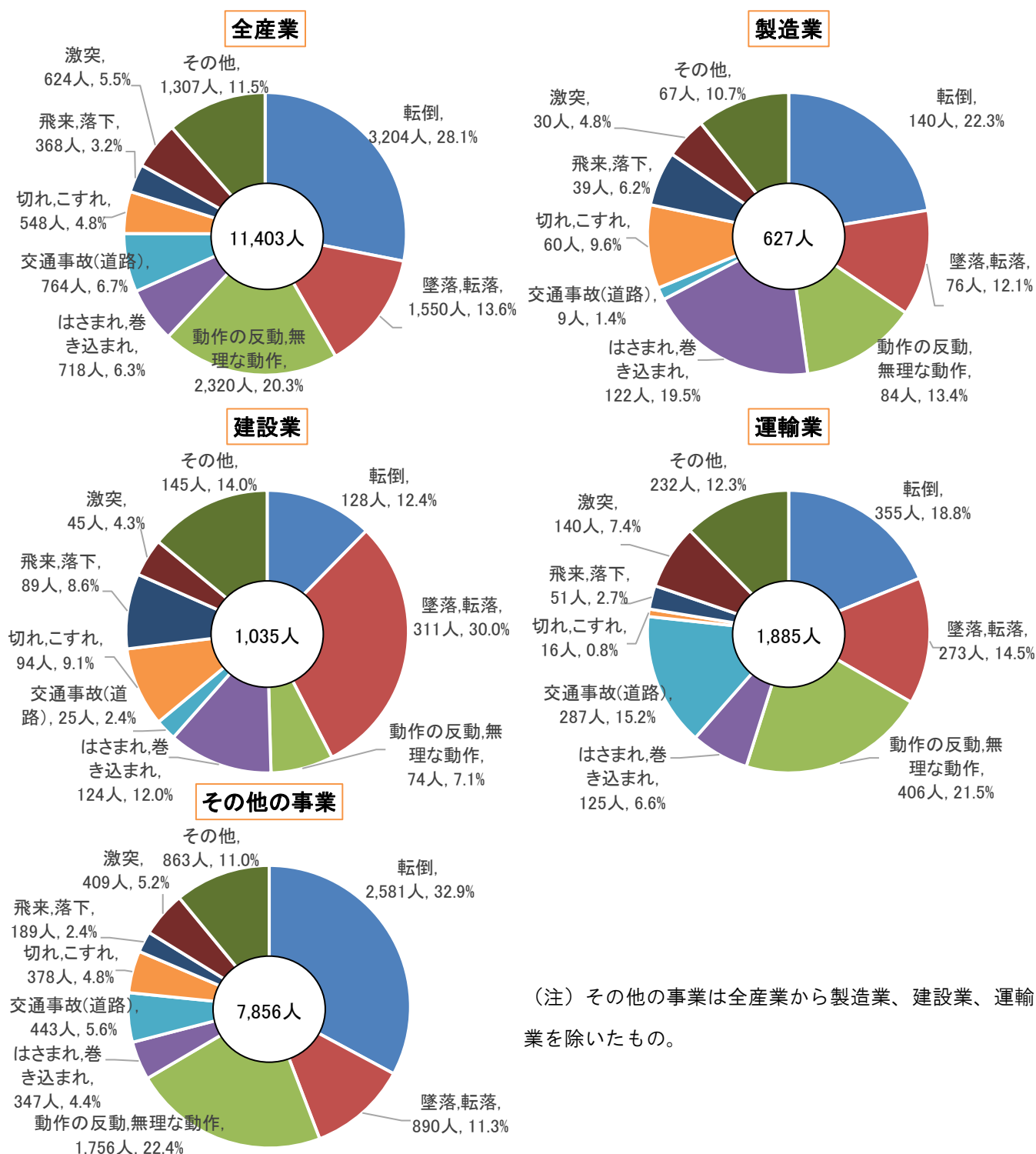
－ 業種によって異なる死傷災害のパターン －

令和6年の休業4日以上死傷災害を「事故の型」と「起因物」に分類すると、業種によって特徴のある災害パターンを示しています。

(1) 業種別・事故の型別 (令和6年)

(新型コロナウイルス感染症へのり患によるものを除く)

事故の型別にみると、製造業では「はさまれ・巻き込まれ」、建設業では「墜落・転落」、運輸業では「動作の反動、無理な動作」、その他の事業では「転倒」がそれぞれ高い割合を示しています。

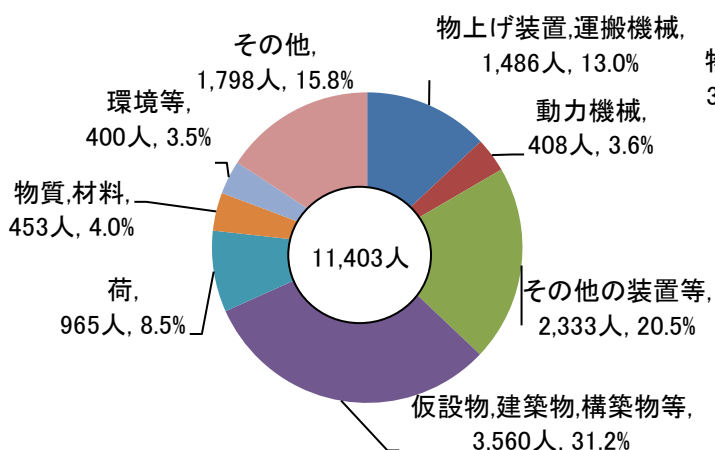


(2) 業種別・起因物別（令和6年）

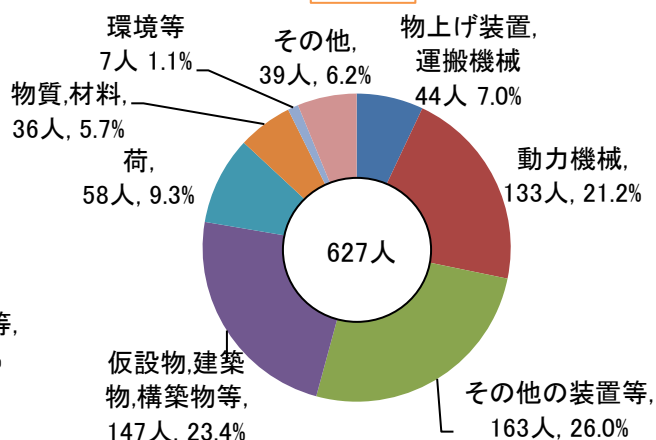
（新型コロナウイルス感染症へのり患によるものを除く）

起因物別にみると、製造業では「動力機械」（食品加工用機械など）、建設業では「仮設物・建築物・構築物等」（足場など）、運輸業では「物上げ装置、運搬機械」（トラックなど）、その他の事業では「仮設物・建築物・構築物等」（階段など）が高い割合を示しています。

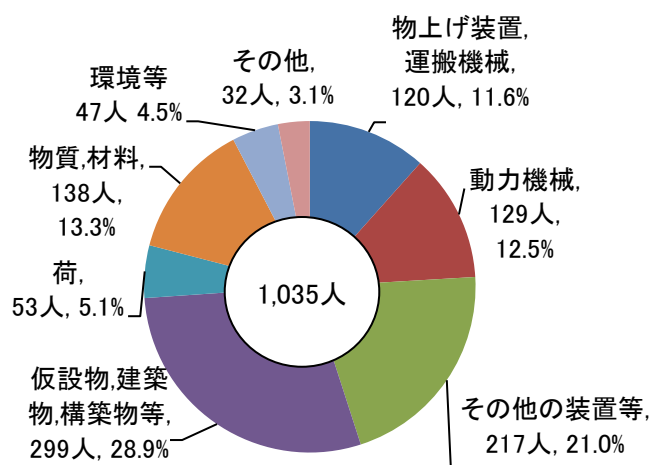
全産業



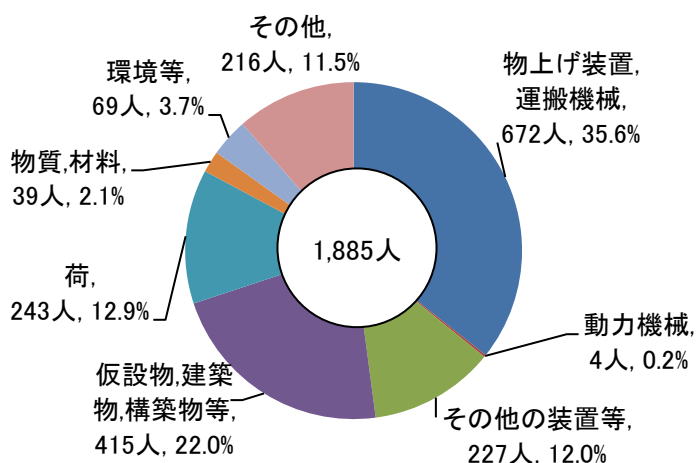
製造業



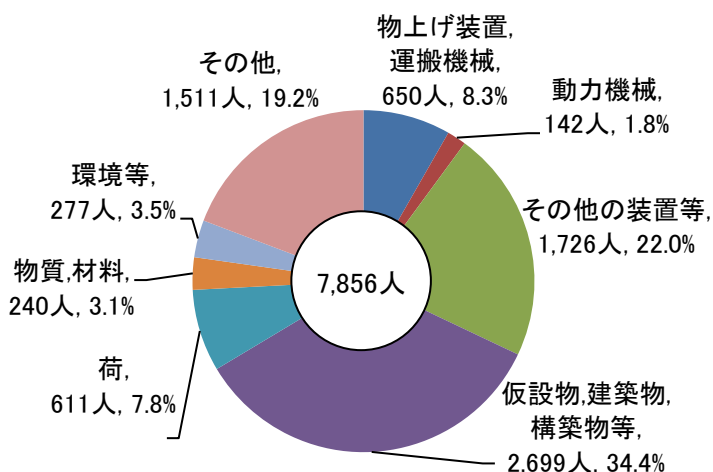
建設業



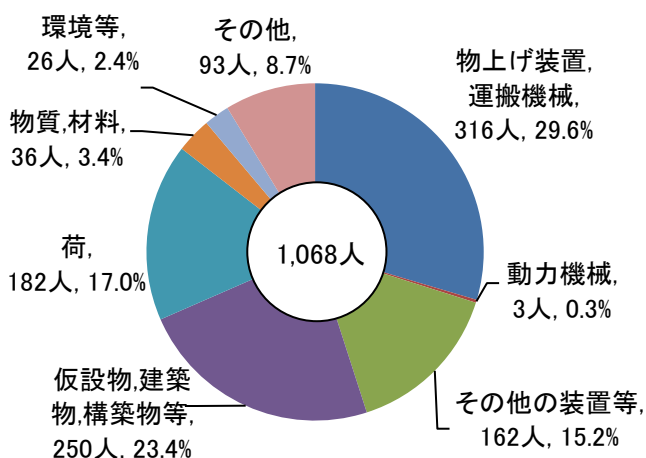
運輸業



その他の事業



運輸業のうち陸上貨物運送事業



過去5年間の工事別死亡災害発生状況をみると、「建築工事」が53人（58.9%）と半数以上を占めており、事故の型別では「墜落、転落」が36人（40.0%）、起因物別では「仮設物、建築物、構築物等」が32人（35.6%）とそれぞれ最も多くなっています。

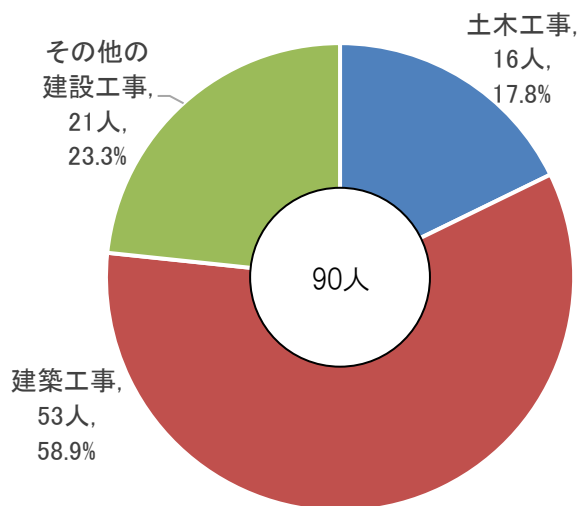
墜落高さ別にみると、「2～5 m未満」が15人と最も多く、また、2 m未満の高さからの墜落死亡者数も7人となっています。

起因物別で最も多い「仮設物、建築物、構築物等」32人の具体的内訳をみると、「足場」が9人（28.1%）と最も多くなっています。

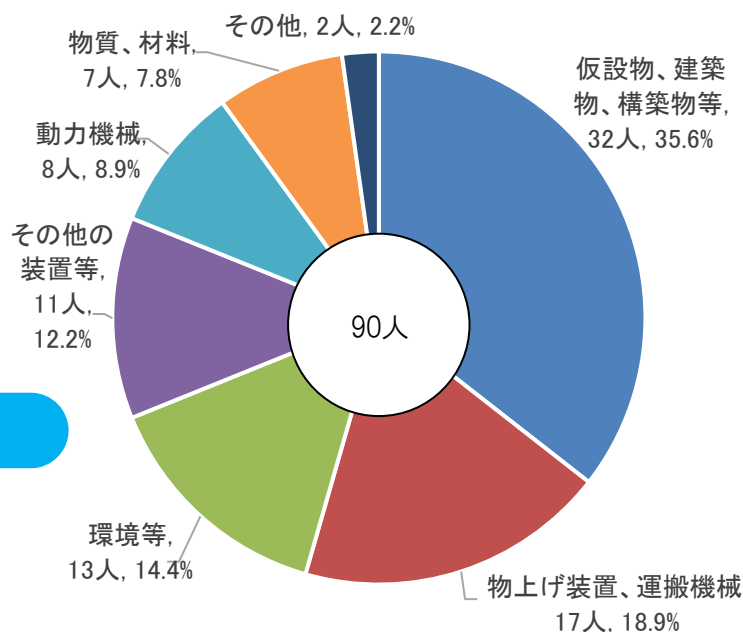
年齢別にみると、50歳代が26人と最も多く、50歳以上が全体の5割を超えています。

経験年数別にみると、10年以上の経験者65人（72.2%）、1年未満の経験者4人（4.4%）となっています。

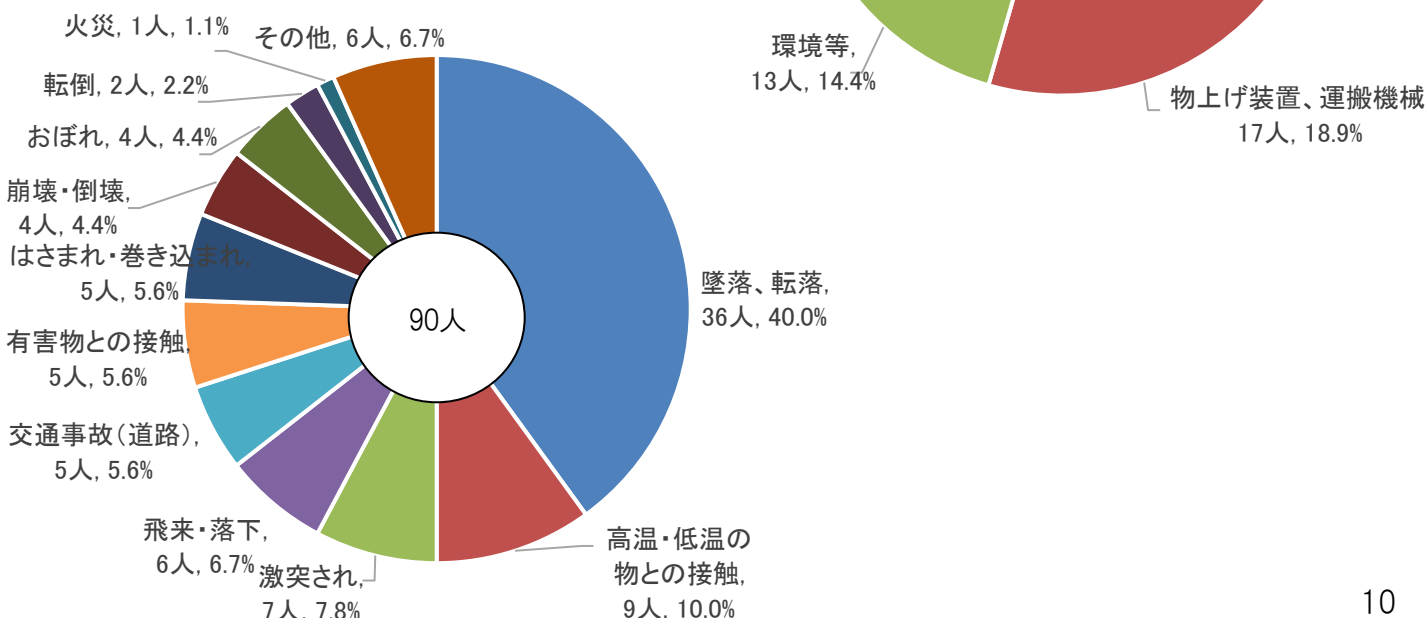
工事別発生状況



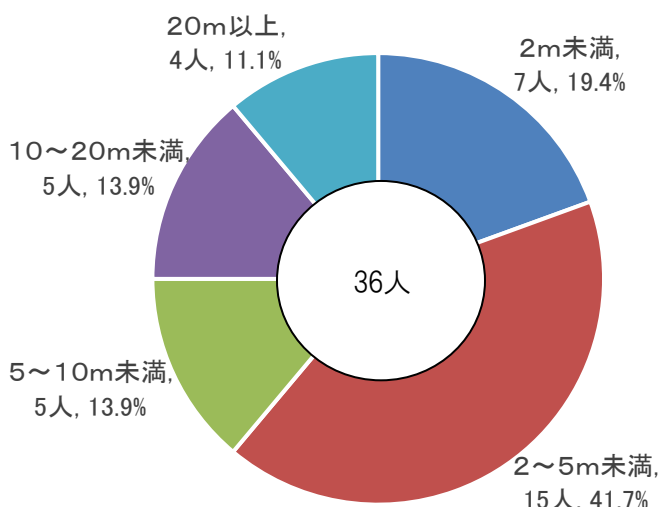
起因物別発生状況



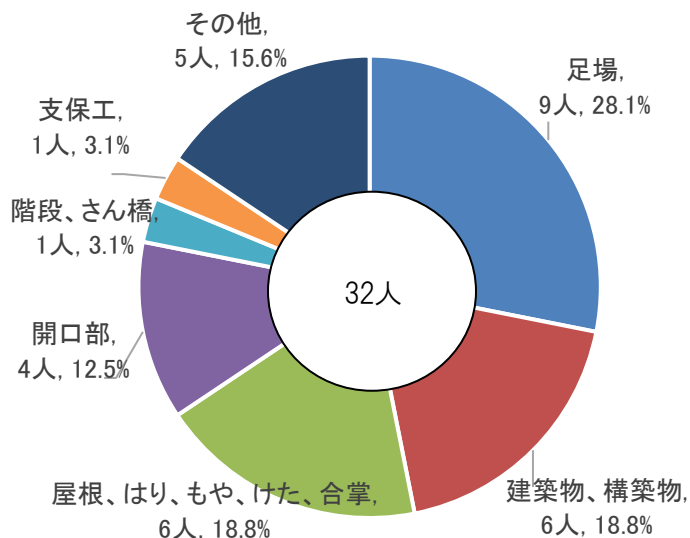
事故の型別発生状況



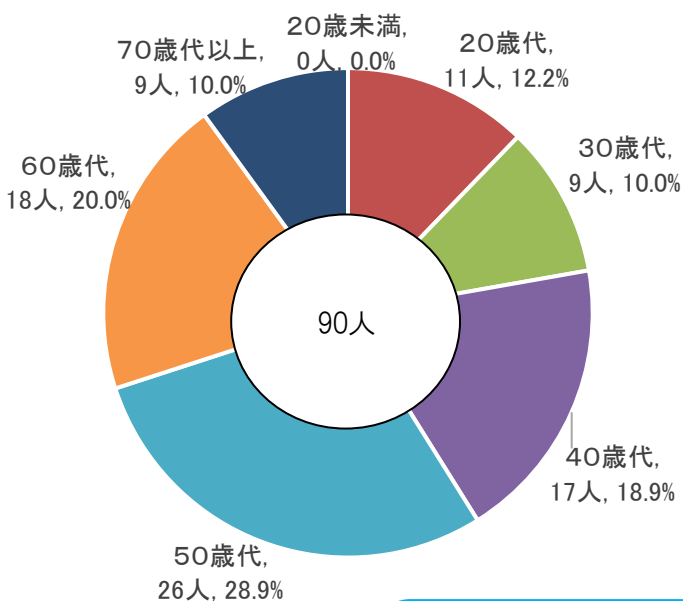
墜落の高さ別発生状況



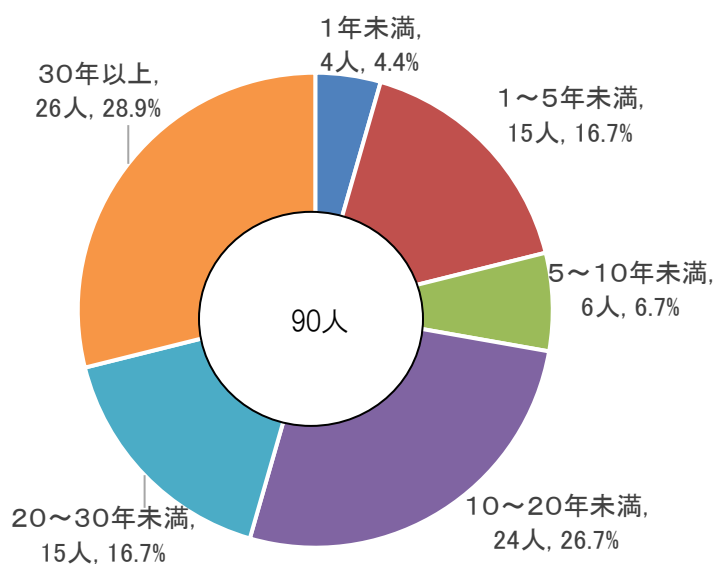
仮設物、建築物、構築物別発生状況



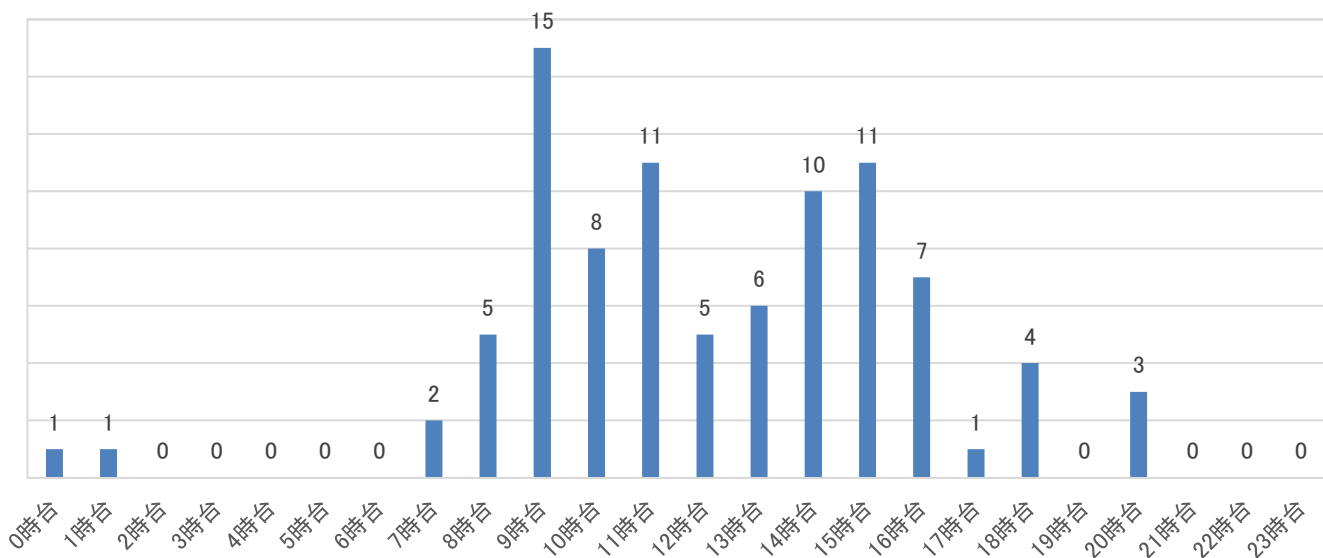
年齢別発生状況



経験年別発生状況



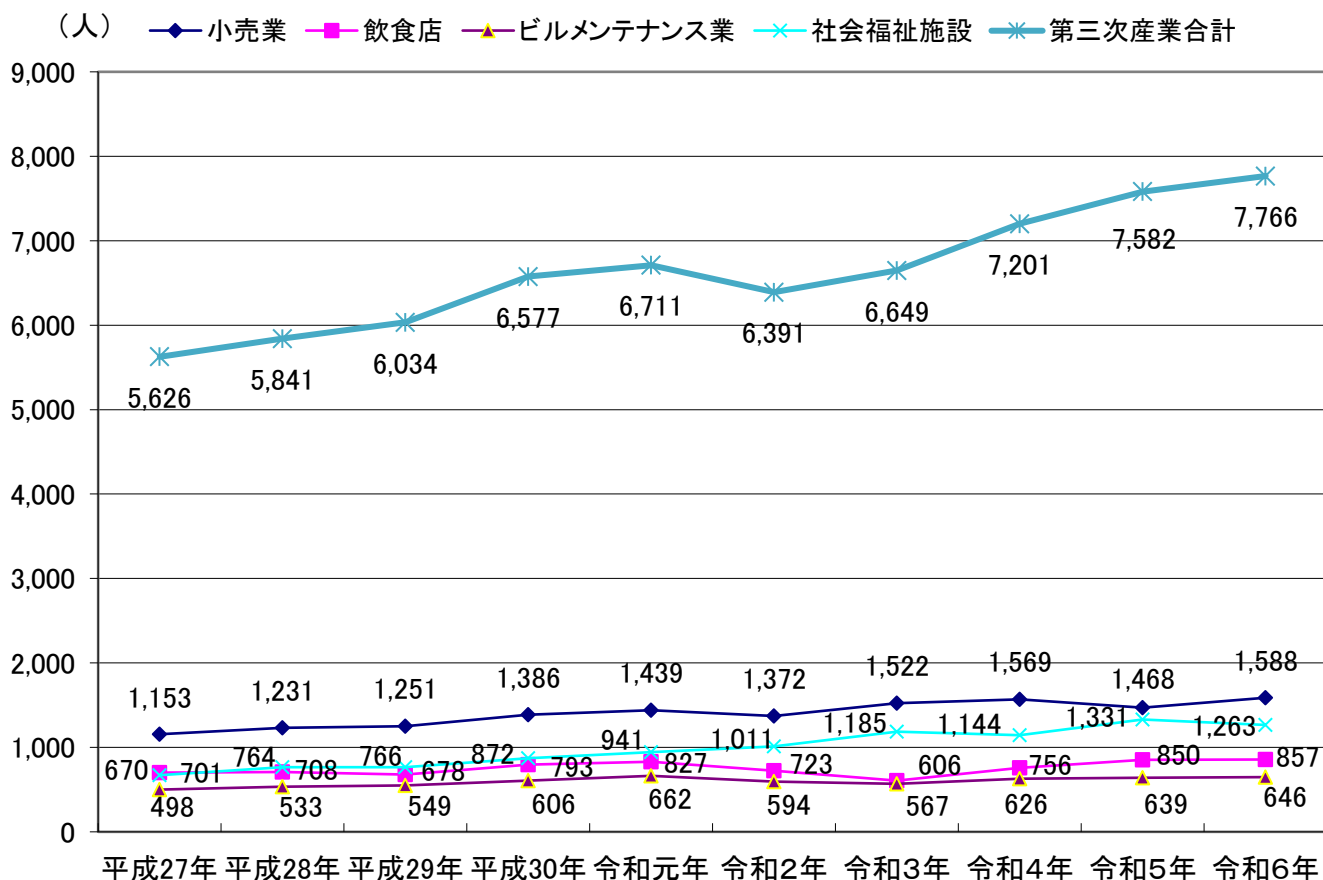
発生時刻別



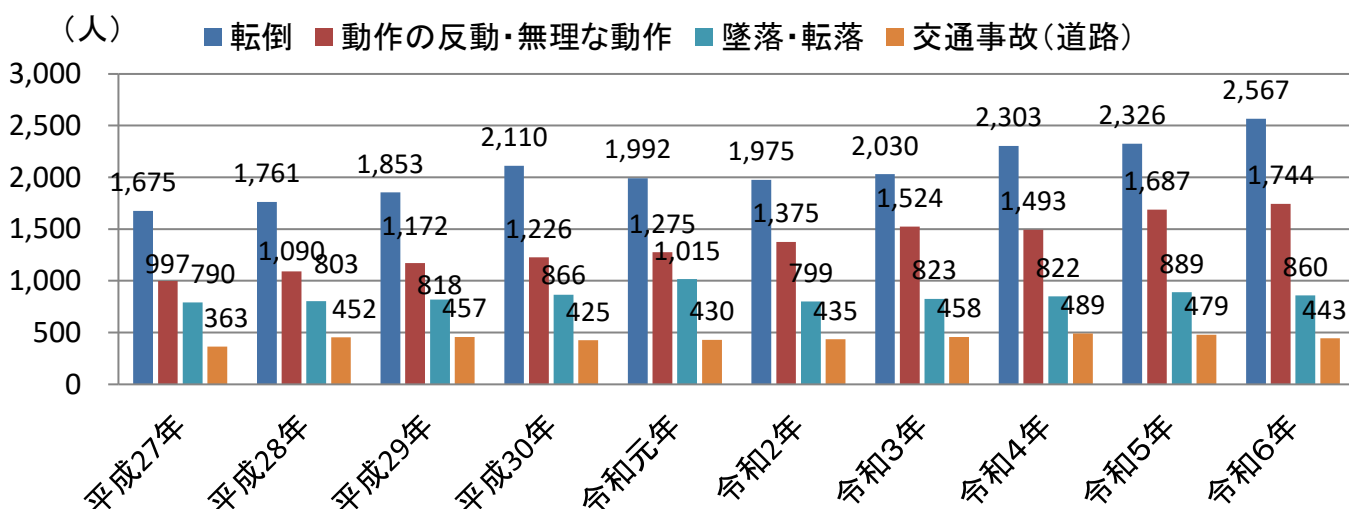
令和6年の第三次産業における新型コロナウイルス感染症へのり患によるものを除いた休業4日以上の死傷者数は7,766人で、前年と比較すると184人（2.4%）増加しました。第三次産業の中では、小売業、社会福祉施設、飲食店、ビルメンテナンス業の順に多く、この4業種で第三次産業の56.1%を占めています。

事故の型別では、「転倒」が2,567人と最も多く、第三次産業全体の33.1%を占めています。

第三次産業における死傷災害発生状況



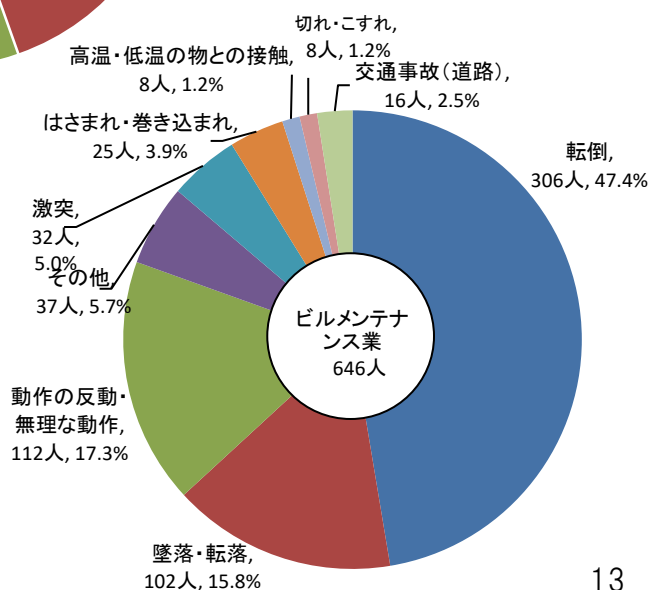
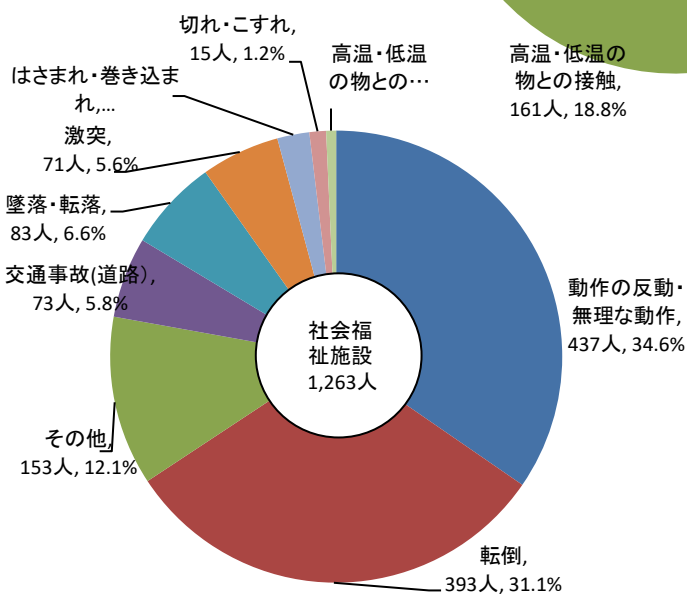
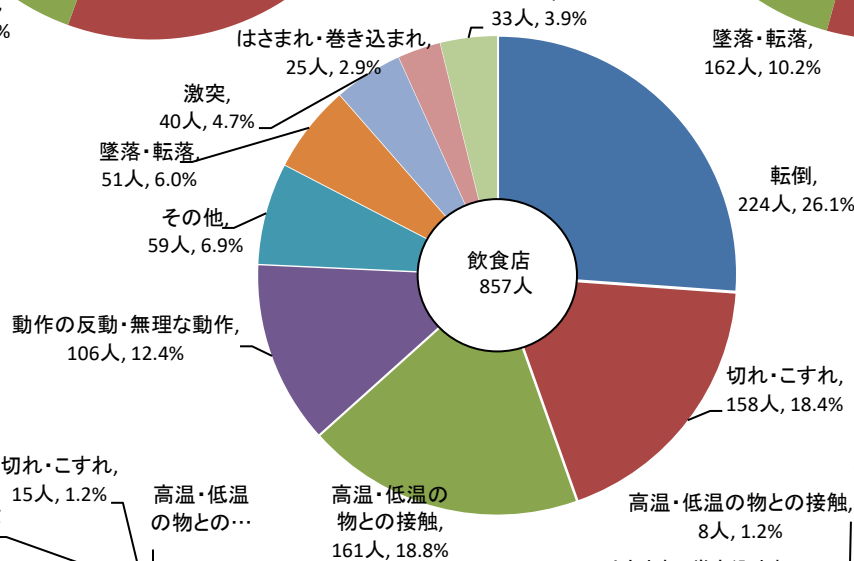
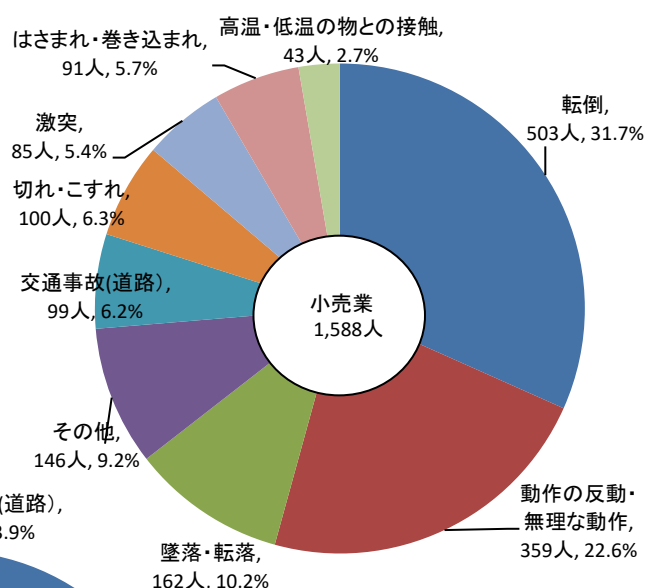
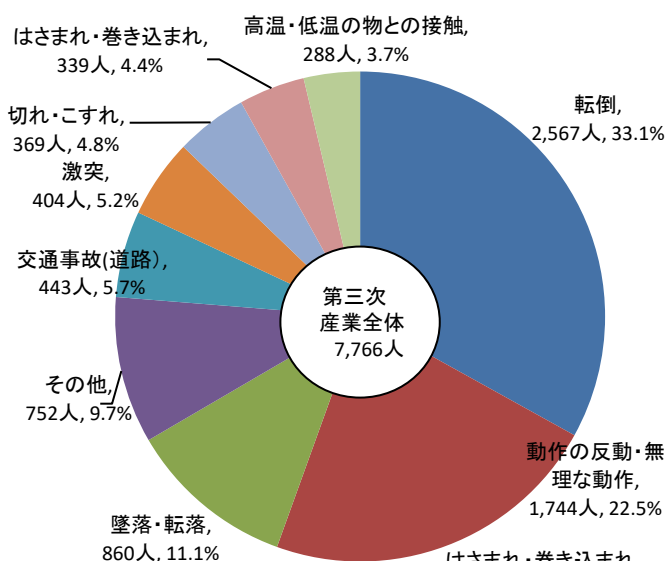
第三次産業死傷災害の「事故の型」別推移



第三次産業における業種別・事故の型別死傷災害発生状況（令和6年）

令和6年の第三次産業の事故の型別では「転倒」の割合が最も多くが33.1%を占めており、次いで「動作の反動・無理な動作」の22.5%となっています。

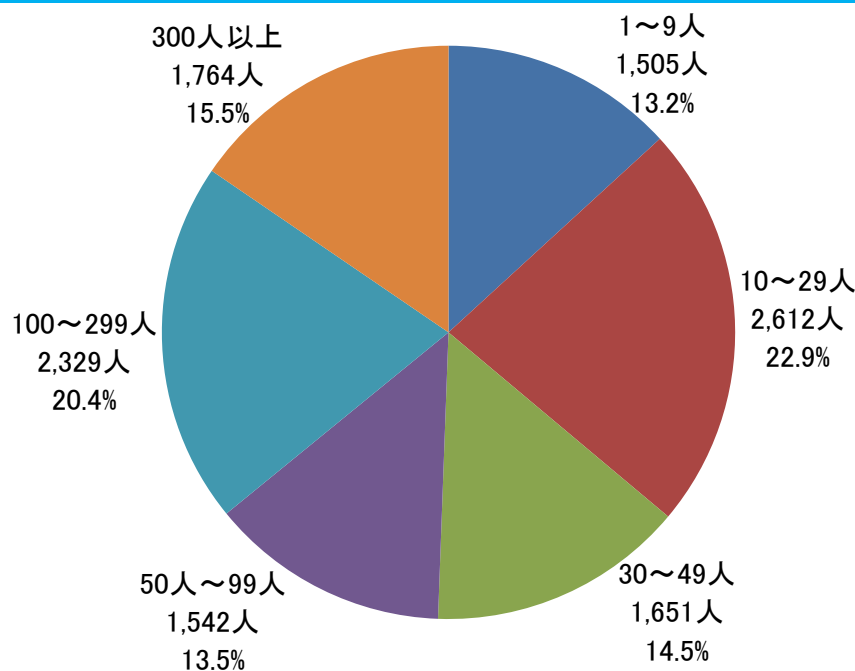
業種別にみると、小売業では「転倒」、「動作の反動・無理な動作」が、飲食店では「転倒」、「切れ・こすれ」が、社会福祉施設では「動作の反動・無理な動作」、「転倒」が、ビルメンテナンス業では「転倒」、「墜落・転落」が多く発生しています。



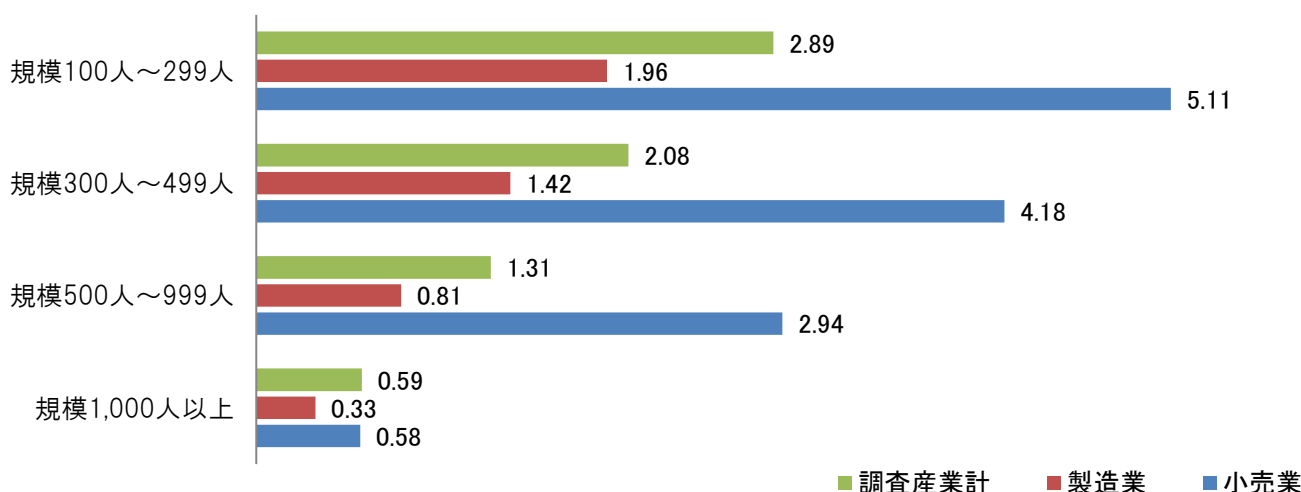
労働災害動向調査による全国の規模別の度数率(労働災害の発生頻度を示す指標)をみると、調査産業計、製造業、小売業いずれも、規模が小さくなるに従って度数率は高くなっています。

製造業では、規模1,000人以上の事業場の度数率が0.33に対し、規模100人～299人の事業場が1.96となっており、災害の頻度において約6倍高くなっている状況にあります。

事業場規模別死傷者数(休業4日以上)(令和6年) (東京)



事業場規模別度数率 (令和6年) (全国)



度数率とは、
$$\frac{\text{労働災害による死傷者数（休業1日以上）}}{\text{延べ実労働時間数}} \times 1,000,000$$

＜資料＞労働災害動向調査（厚生労働省調査結果）

常用労働者100人以上の事業場及び総合工事業の工事現場における、休業1日以上の業務上の死傷災害発生率を取りまとめたものである。

製造業死亡災害事例

月	業種	職種	事故の型	発生状況の概要
		年齢	起因物	
		経験		
8月	電気機械器具製造業	技術者	交通事故（道路）	長野県の協力会社へ向かうため、中央自動車道を乗用車で移動中に工事渋滞に遭い、ハザードランプを点滅させて停車していたところ、後方から走行してきた乗用車に追突された。
		30歳代	乗用車、バス、バイク	
		10年以上20年未満		

建設業死亡災害事例

月	業種	職種	事故の型	発生状況の概要
		年齢	起因物	
		経験		
4月	その他の建設業	設備機械工	はさまれ、巻き込まれ	機械式駐車場の整備工事中において動作確認していた際、リフト付近で異音が生じたため、運転させながら覗き込んだところ、車両を載せるパレットの支柱と設備の間に被災者の頭部が挟まれたもの。
		40歳代	エレベータ、リフト	
		10年以上20年未満		
5月	その他の建設業	作業者・技能者	交通事故（道路）	機械設備の設置工事現場に車で向かう途中、高速道路上で停止していたところを後方からのトラックに衝突されたもの。
		40歳代	トラック	
		10年以上20年未満		
6月	建築工事業	解体工	飛来、落下	解体現場における重機による地上解体中、落とした解体ガラが地上にあった配管をはじき飛ばし、重機の後方で散水作業をしていた被災者の胸に直撃したものと推測される。
		50歳代	その他の材料	
		10年以上20年未満		
7月	その他の建設業	作業者・技能者	はさまれ、巻き込まれ	地下スロープ内で高所作業車のアウトリガー張り出し作業中に、高所作業車が逸走し始め、被災者を巻き込んだもの。
		50歳代	高所作業車	
		20年以上30年未満		
7月	建築工事業	作業者・技能者	激突され	被災者は、掘削用機械による敷き鉄板を移動させる作業の補助業務に従事していたところ、掘削用機械が転倒し、同機械の下敷きとなったもの。
		20歳代	掘削用機械	
		10年以上20年未満		
7月	建築工事業	鉄筋工	墜落、転落	屋上階床上に搬入した鉄筋束の端部をクレーンで持ち上げようとしたところ、かけていたワイヤーロープが外れ、荷が落下した衝撃で資材を置いていたデッキプレートが崩落し、被災者が巻き込まれて約11m墜落したもの。
		20歳代	作業床、歩み板	
		5年以上10年未満		
8月	建築工事業	管理者	はさまれ、巻き込まれ	高架駅の設備更新工事において、道路上に高所作業車を配置し、被災者ほか2名が同作業床に乗り、順次、同駅下部の外壁材を取り外しながら内部を点検する作業中、同作業床内部から身を乗り出して操作していた被災者が同外壁材と作業床の手すりの間に頸部が挟まれ、死亡したもの。
		50歳代	高所作業車	
		20年以上30年未満		
9月	建築工事業	その他の作業者	激突され	コンクリートポンプ車の輸送管内の生コンクリート除去作業のため、洗浄ボールを輸送管に挿入し、圧縮空気を輸送管内に送り、洗浄ボールで生コンクリートを押し出していたところ、ホースの先端から白煙と洗浄ボールが飛び出し、その反動で振れたホースに激突されたもの。
		50歳代	その他の建設機械等	
		30年以上		

運輸業死亡災害事例

月	業種	職種	事故の型	発生状況の概要
		年齢	起因物	
		経験		
5月	道路貨物運送業	貨物自動車運転者	墜落、転落	客先工場敷地内において、保護帽を着用せずにバン型の貨物自動車の荷台から空容器を地上に降ろす作業をしていたところ、荷台後方から後ろ向きに約1mの高さを墜落し、頭部を強打したものの。
		50歳代	トラック	
		10年以上20年未満		
7月	陸上貨物取扱業	作業者・技能者	墜落、転落	配達先のアパートの階段から転落し、頭部を強打したことにより死亡したものの。
		60歳代	階段、栈橋	
		30年以上		

第三次産業死亡災害事例

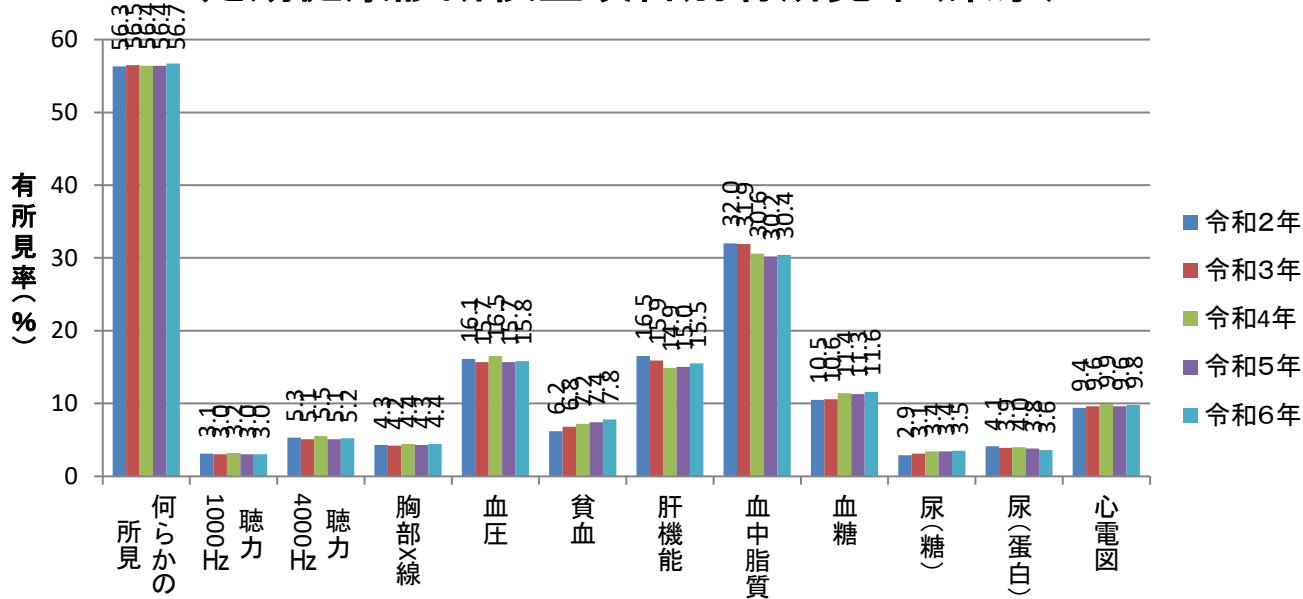
月	業種	職種	事故の型	発生状況の概要
		年齢	起因物	
		経験		
1月	その他の接客娯楽業	作業者・技能者	転倒	公園の親水設備に設けた通行止めのロープを開錠するため、石段を登っていたところ、転倒し、頭部を強打したもの。
		70歳代	階段、棧橋	
		10年以上20年未満		
2月	社会福祉施設	作業者・技能者	墜落、転落	事業場敷地内において、大雪で折れた木が他の木に引っ掛かりその先端が通行路を塞いだため、被災者は当該かかり木の枝を掃うためにかかり木にかけたはしごに上り、チェーンソーで作業中にはしご上から地面に墜落したものと推測される。
		60歳代	はしご等	
		1年以上5年未満		
8月	その他の事業	警備員	交通事故（道路）	道路上規制帯内での工事現場の警備業務に従事していた被災者が、当該工事現場の当日の作業及び片付けがほぼ終了し、被災者も引き上げようと規制帯内を歩いて移動していたところ、車両誘導に従わずに侵入してきたバイクに後方から追突されたもの。
		10歳代	乗用車、バス、バイク	
		1年未満		
9月	清掃・と畜業	作業者・技能者	飛来、落下	フォークリフトの油圧装置にネジを取り付けるため、上げたフォークの下に1本の木材を安全支柱として設置した後、フォークの下で油圧装置の油圧を下けたところ、フォークを支えている木材が折れ、フォークが被災者の上に落下したもの。
		70歳代	フォークリフト	
		10年以上20年未満		
10月	その他の事業	寄宿舎・寮の管理人	墜落、転落	補助寮務係として、巡回や郵便物の管理などの寮の管理業務に従事していたところ、階段から転落したもの。
		60歳代	階段、棧橋	
		1年以上5年未満		
10月	卸売業	作業者・技能者	転倒	資材置場において、資材が雨で濡れるのを防ぐため、段ボールで被せる作業を行う際に、段ボールを固定するため平版コンクリートを置こうと、当該コンクリートを持ち運んでいたところ、転倒したもの。
		80歳代	作業床、歩み板	
		30年以上		
10月	その他の事業	作業者・技能者	激突され	派遣労働者が検品作業を行う倉庫内を移動中、後方より後進してきたフォークリフトに轢かれ、死亡したもの。
		50歳代	フォークリフト	
		10年以上20年未満		

令和6年に発生した他の死亡災害事例は、東京労働局のホームページに掲載しています。

東京の定期健康診断の有所見率は年々増加傾向にあり、令和6年は56.7%となっています。また、全国では59.4%となっています。

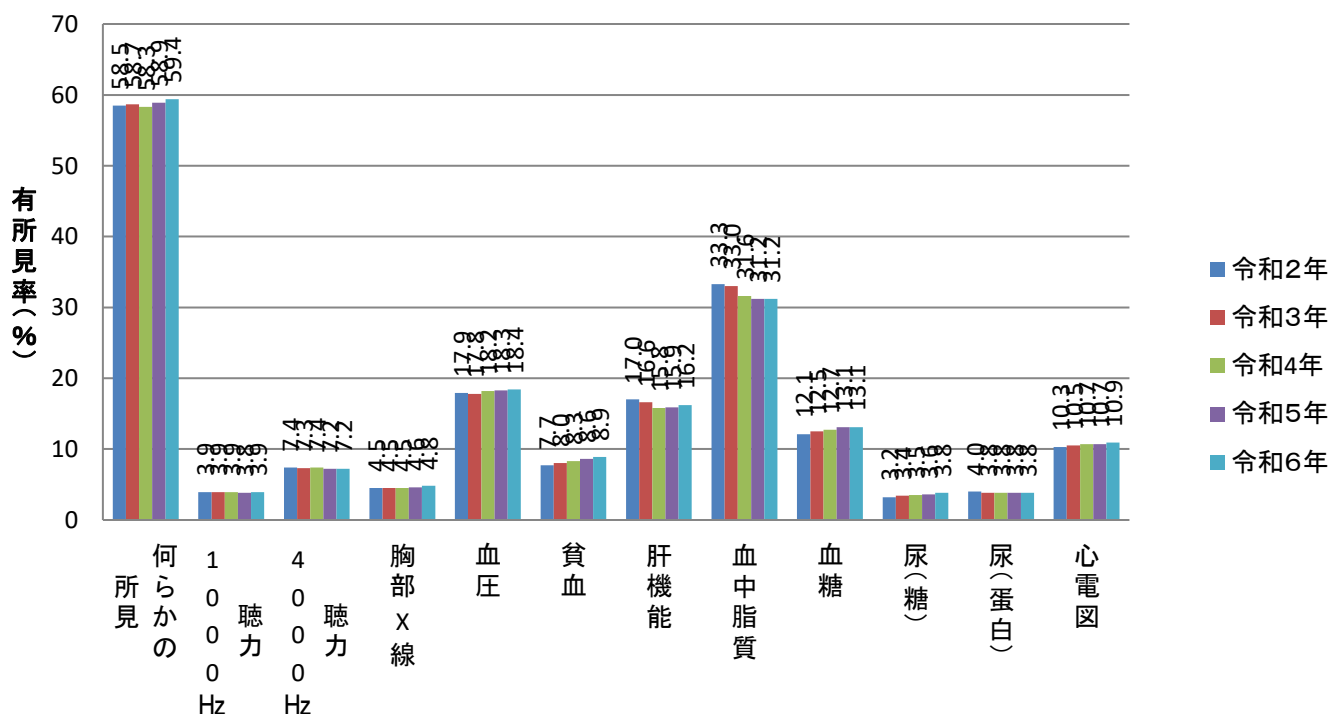
健診項目別では「血中脂質」、「肝機能」、「血圧」等生活習慣病の健診項目の有所見率が高く、それぞれ、30.4%、15.5%、15.8%となっています。

定期健康診断検査項目別有所見率(東京)



* 令和4年分については、令和4年10月の労働安全衛生規則の改正前後の有所見を各期間で加重平均した推計値です。

定期健康診断検査項目別有所見率(全国)

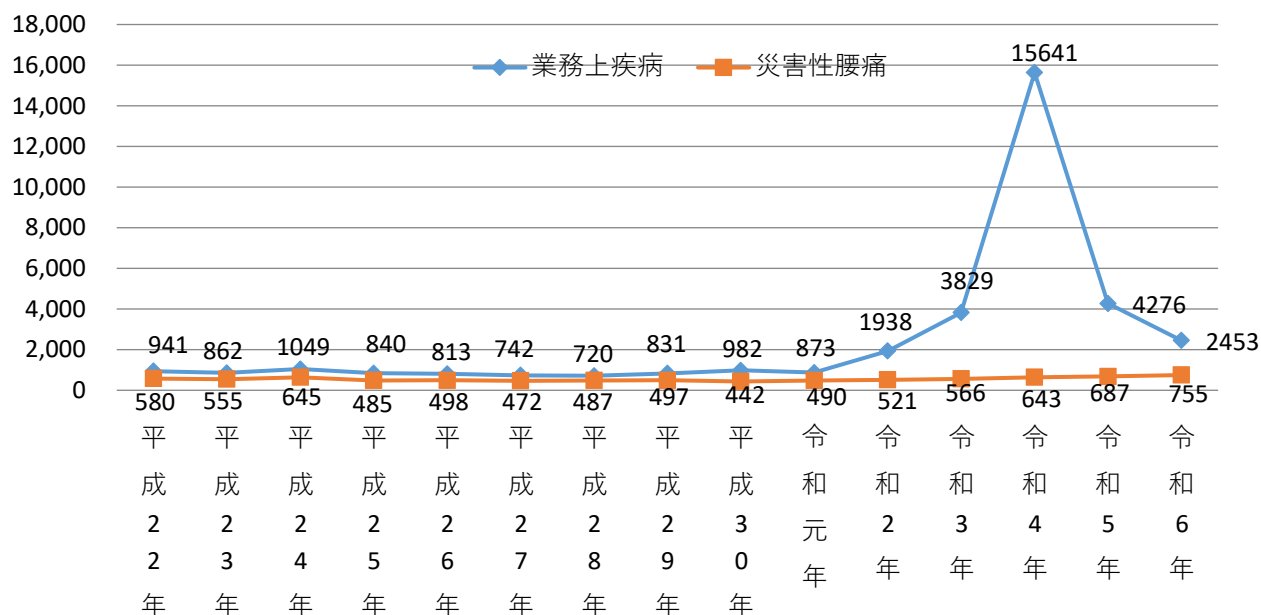


* 令和4年分については、令和4年10月の労働安全衛生規則の改正前後の有所見を各期間で加重平均した推計値です。 17

令和6年の東京の労働災害のうち、業務上疾病（死亡及び休業4日以上。以下同じ）の発生件数については、病原体による疾病（新型コロナウイルス感染症を含む）等の減少により、4割以上減少しました。災害性の腰痛は前年に比べ68人増加し、依然として高い比率を占めています。

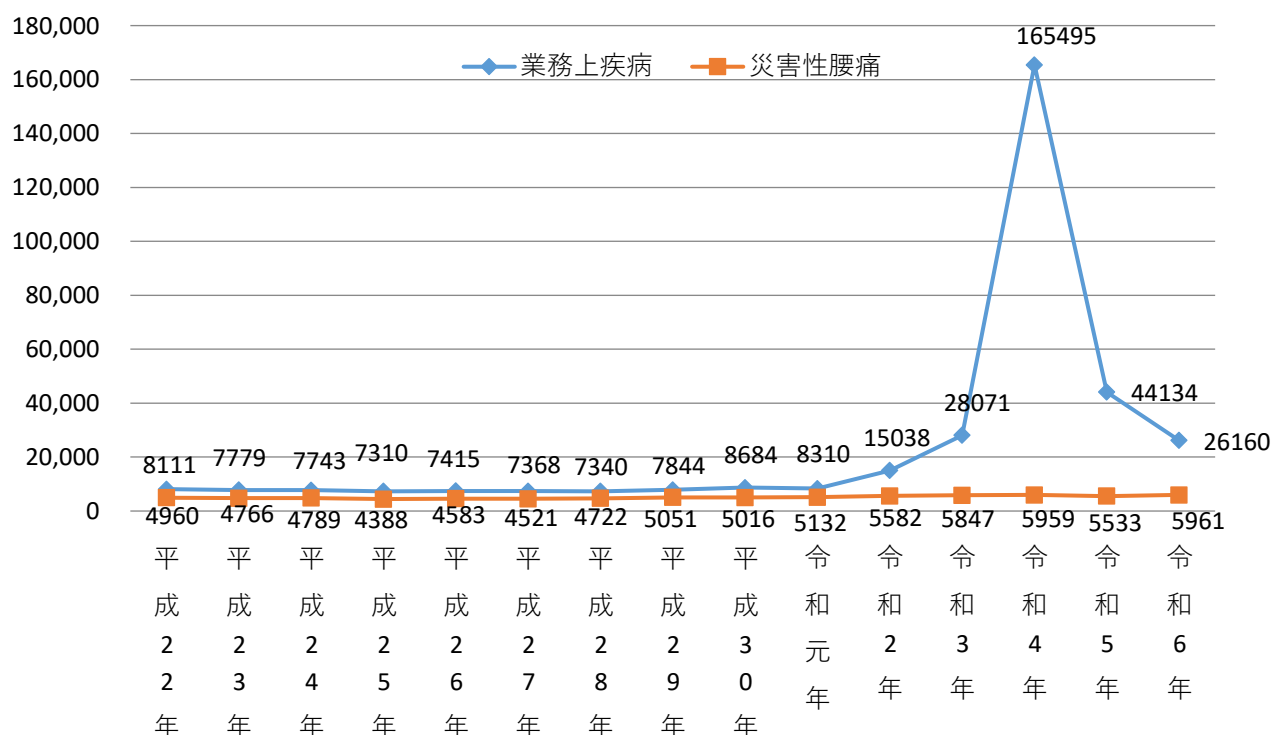
東京

(人)



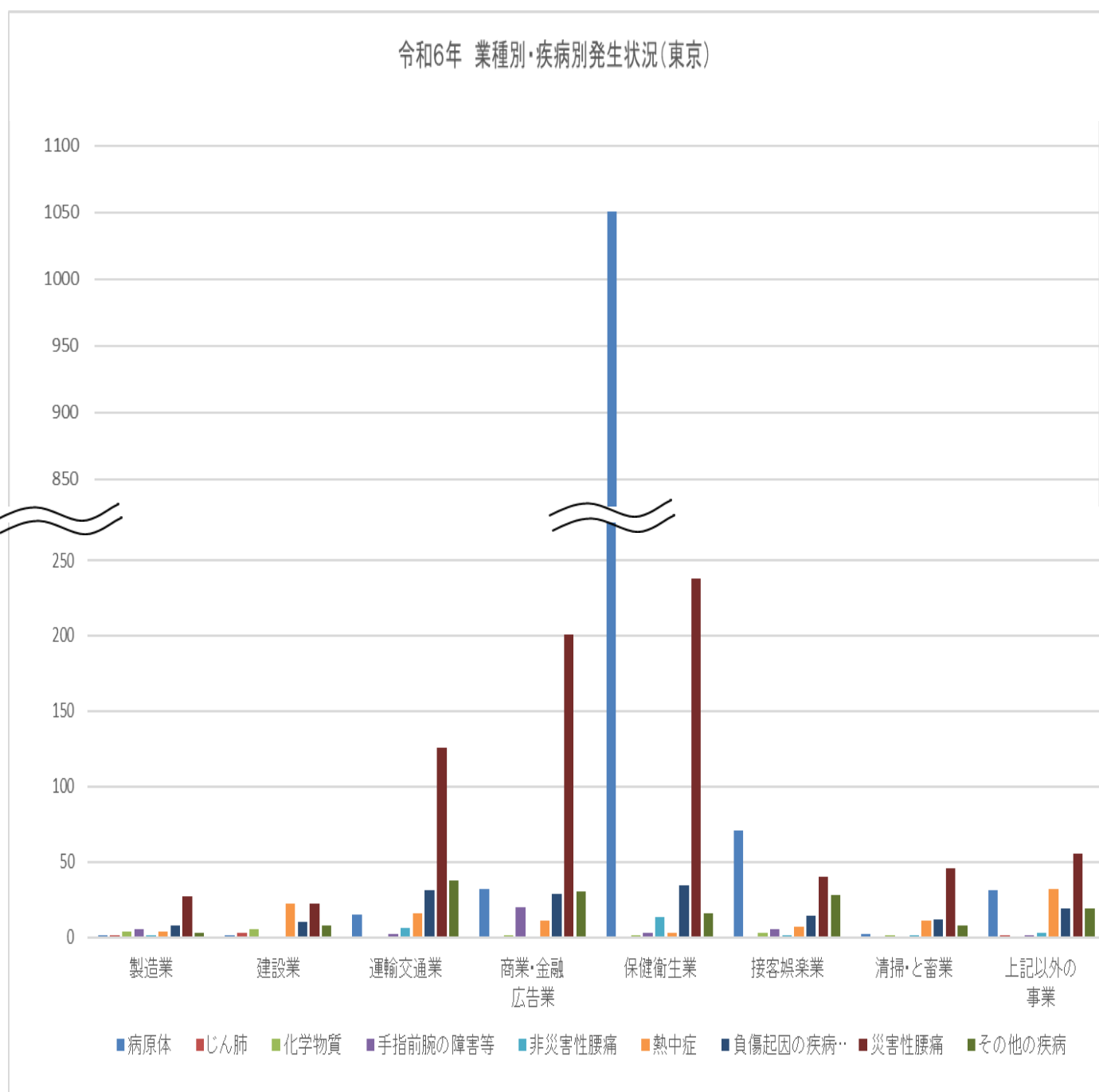
全国

(人)



令和6年 業種別・疾病別発生状況（東京）

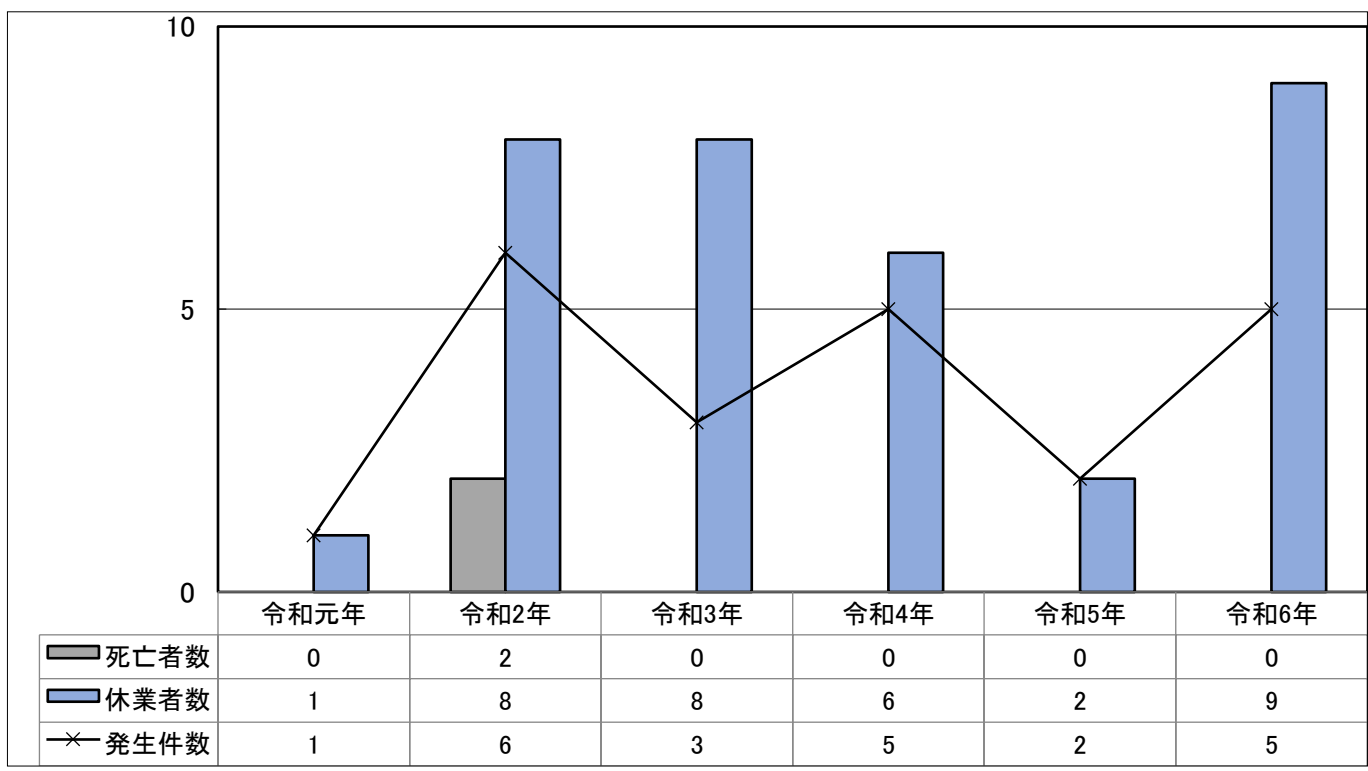
業務上疾病の業種別の発生状況をみると、保健衛生業、商業・金融・広告業の順に多く発生しており、病原体による疾病が最も多く、新型コロナウイルス感染症の影響がみられます。また、新型コロナウイルス感染症を含む病原体を除いて疾病別に見ると「災害性腰痛」が最も多くなっています。



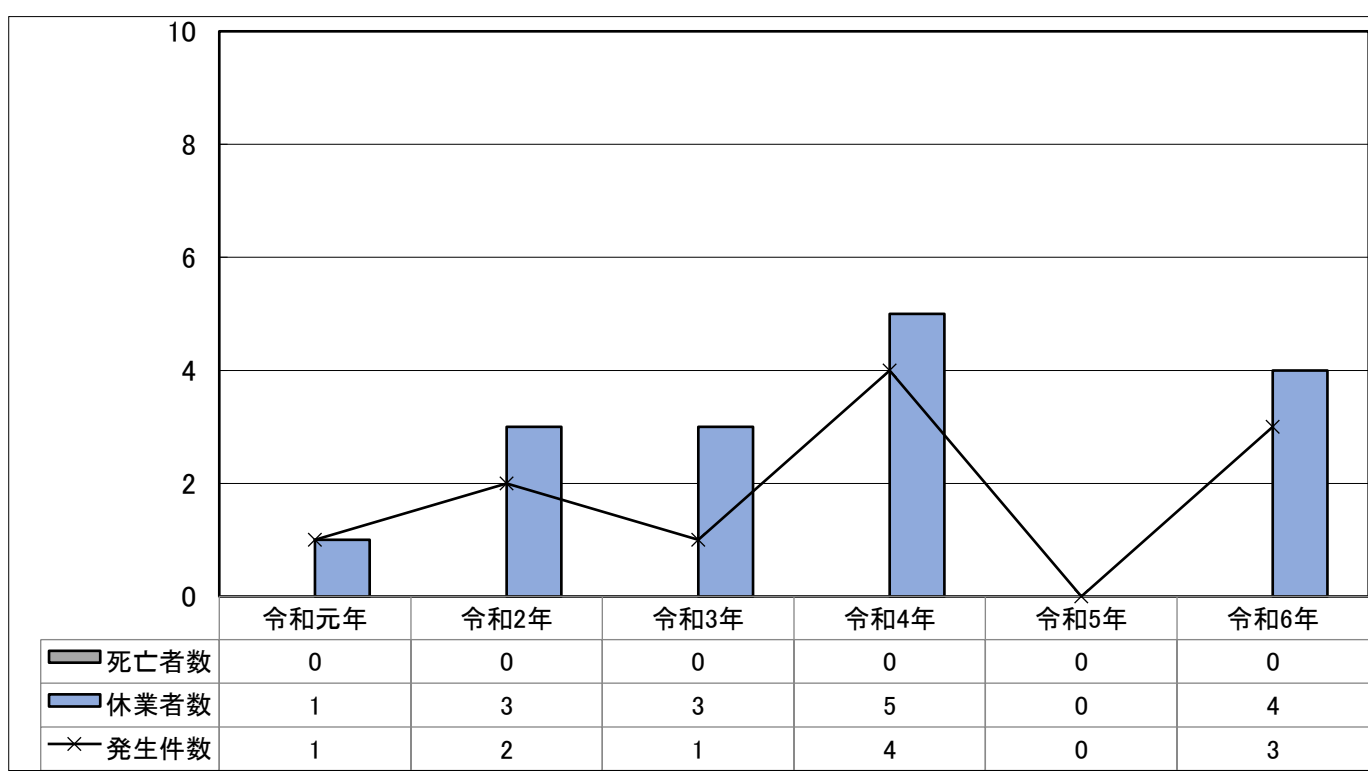
一酸化炭素中毒による労働災害発生状況（令和元年～令和6年）

令和6年の一酸化炭素中毒の発生件数は、全産業で5件、建設業で3件となっています。令和元年から令和6年までの6年間を見ると、全産業で22件の発生がありましたが、そのうち建設業での発生が5割以上（11件）を占めています。

東京、全産業

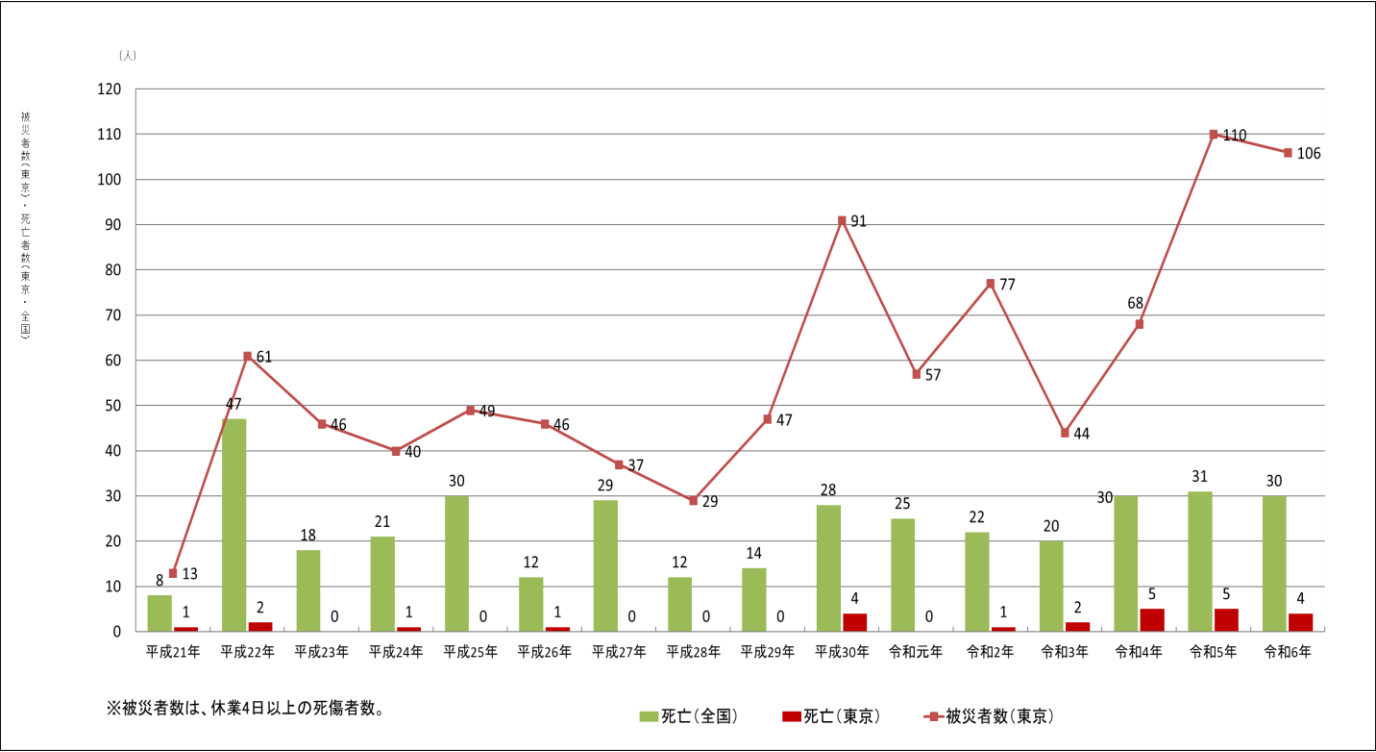


東京、建設業

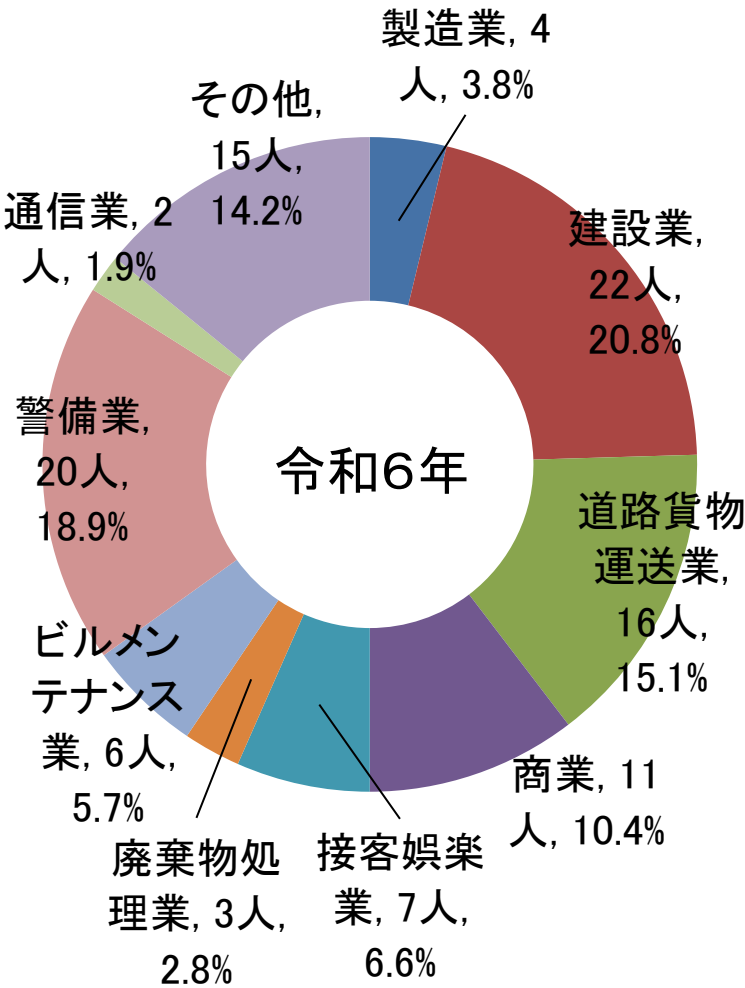


熱中症の発生状況の推移

(1) 年別推移



(2) 業種別発生状況(東京)



	製造業	建設業	道路貨物運送業	商業	接客娯楽業	廃棄物処理業	ビルメンテナンス業	警備業	通信業	その他	計
平成30年	5人	21人	14人	11人	1人	4人	6人	15人	1人	13人	91人
令和元年	1人	13人	7人	7人	0人	4人	6人	11人	1人	7人	57人
令和2年	7人	14人	10人	10人	3人	3人	4人	13人	2人	11人	77人
令和3年	2人	6人	4人	8人	1人	2人	4人	10人	0人	7人	44人
令和4年	1人	12人	11人	8人	0人	4人	8人	16人	0人	8人	68人
令和5年	6人	24人	12人	16人	7人	4人	5人	23人	0人	13人	110人
令和6年	4人	22人	16人	11人	7人	3人	6人	20人	2人	15人	106人

東京の労働衛生関係災害発生事例（令和6年）

化学物質による中毒等

発生月	事業の種類	原因物質	災害のあらまし
4月	飲食店	一酸化炭素	開店前の仕込み作業中、茹で麺機（都市ガス仕様）に火を点火後30分位経過した頃、茹で麺機付近で作業をしていた労働者2名が体調不良を起こした。その後他の場所の労働者2名も体調不良を起こし、救急搬送され、診察の結果、一酸化炭素中毒と診断されたもの。災害発生時、窓等は開放しておらず、換気設備も稼働していなかった。
4月	建築工事業	一酸化炭素	地下街と接続する地下通路の新設工事に伴い、杭打ち等の支障となる下水道などの埋設物を発見するための探針作業において、探針作業をエンジン式のハンドオーガー（ボーリング機械の一種）を使用し、作業を行っていたところ、ハンドオーガーのエンジンユニット部からの排気ガスを吸い込み、体調不良を起こした。搬送された病院で一酸化炭素中毒と診断されたもの。災害発生時、ハンドオーガーのエンジンユニット部は地下街の地下空間内に設置され、換気設備を設置し、換気をしていたが、換気量が不足していたと思われる。
6月	ビルメンテナンス業	水酸化ナトリウム	厨房設備のメンテナンスで水酸化ナトリウムを希釈した薬品でダクトのパーツを洗浄している際、装着していたゴム手袋に穴が空いていた事に気付かず作業していたため、水酸化ナトリウムが直接、両腕に浸透してしまい化学熱傷を引き起こしたもの。
11月	化学工業	フッ化水素酸	製造作業所において、フッ化カルシウム反応作業のため、フッ化物反応タンクにフッ化水素酸をエアー駆動のポンプにて移液作業中、ポンプの不調を感じ、ポンプ吐出口よりフッ化水素酸が排出されているか視認するため、フッ化物反応タンクの炭酸カルシウム投入開口部より、保護メガネを装着せず、覗いたところ、吐出口より排出された液が跳ね返り、フッ化水素酸が目に入り被災したもの。
12月	建築工事業	一酸化炭素	ビルの内外装工事において、1階の床に打設されたコンクリートの一部を撤去するために手押し式のコンクリートカッターで切り出した後、ブレーカーで粉砕する作業を労働者3名で行っていたところ、コンクリートカッターを押していた労働者1名がコンクリートカッターの排気ガスを吸い込み、体調不良を起こした。作業から離れ、休んでいたが、回復しないため、病院に搬送された。診察の結果、一酸化炭素中毒と診断されたもの。災害発生時、室内の開口部をすべて開放し、送風機により換気をしていたが、換気量が不足していたと思われる。

熱中症

発生月	事業の種類	傷病名	災害のあらまし
7月	土木工事業	熱中症	学校のグラウンドの改修工事を行っていたところ、熱中症により死亡したもの。
8月	倉庫業	熱中症	施設屋外にある冷凍機械室の屋上にて、冷凍設備等日常巡回点検の作業中、外気温及び冷凍設備等の排熱により、高温状態となっている中で、点検作業を行っていたため、脱水症状を起こし、病院に救急搬送されたもの。

腰痛

発生月	事業の種類	傷病名	災害のあらまし
4月	道路旅客運送業	腰痛	整備工場内でバス車内の整備作業中、54ある座席のシートベルト着脱点検作業中、立ったまま腰を曲げる姿勢で作業を行っており、全座席の半分ほど作業が終わったときに、腰に痛みを感じ、その場で動くことができなくなったため、救急車を呼び病院へ搬送されたもの。
8月	卸売業	腰痛	組合員宅へ商品の配達作業中、飲料（600mlの24本入りケース（約14kg）を2ケース、550mlの24本入りケース（約13kg）を2ケース）を配達車両から顧客の玄関先まで中腰前屈みの姿勢で、往復して運んでいたところ腰に強い痛みが生じ負傷したもの。
12月	倉庫業	腰痛	物流センターの倉庫内にて、コンベアによる仕分け作業中、重量物の入った段ボール商品をコンベアから台車へ移動している時、台車がコンベアより低い位置にあったため、腰に負担がかかり、腰を痛めてしまったもの。

感染症等その他

発生月	事業の種類	傷病名	災害のあらまし
11月	その他の事業	ツツガ虫病	会社所有の千葉県にある山林を整備作業中に腰のあたりを虫に刺された。その5日後、発熱し、発疹がでたため、病院で受診したところ、ツツガ虫病と診断されたもの。